季節高校生

GORO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
季節高校生

【Ｎコード】
Ｎ８０７６Ｉ

【作者名】
ＧＯＲＯ

【あらすじ】
季節が変わり、夏が来た。
海やら同居やら肝試し、オマケに事件勃発や、旅行などなど。
籔笠芥木の夏が始まる……。

始まり（前書き）

お笑い系で書いて見ました。何かあれば感想をお願いします。

始まり

桜が咲く四月…

とある学校で…

俺とアイツとの学校生活が始まる。

第一話……始まり

四月二十日
四時間目が終わった休み時間。

ゴンッ！！

健全な黒髪の高校一年生、藪笠　芥木（やぶかさ　かいき）は突然頭に固い固い本を投げつけられた。

「きゃはははは！！」

そして遅れて腹を抱えて笑う女の声が聞こえてくる。藪笠はゆらゆらとした動きで（固い固い本の直撃で効いているため）振り返る。

そこには同じ茶髪の高校一年生、鍵谷（かぎたに）　真木（まき）がたたずんでいた。

そしていつも通り…

「てめぇ、いつもいつもぶざけんじゃねーぞ！！」
「別にふざけてないよ、楽しんでるの♪」
「っ～～～この馬鹿間抜けヤロー！！！」
「勝手にいってなよ、馬鹿」
「黙れ馬鹿！！」
「あれ～、うるさい犬が吠えてる～」
「ボケ！！」
「ああ～うるさいな「ぺっちゃパイ！！」
「ッ！！！？何つったこのボケクソヤロー！！」

教室はバトルロイヤルとかした。

本やら鞄やらシャーペンやら様々な物が飛び交う。

そしてその光景を眺めている生徒たちの中の二人。黒髪の高校一年生、浜崎（はまざき）　玲奈（れな）と同じく黒髪の高校一年生、島秋（しまあき）　花（はな）は、

「また始まったか……」
「いつもの事だよ、いつもの…」

はぁ～っと息を吐いた。

そして三十分後…

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ…」
「うう……ぐずっ……」

結果、藪笠が数学の本を鍵谷の顔面に直撃させ勝利した。

しかしその勝利を獲得した直後、

ズドズドズドズドズドズドズド！！

物凄い響き渡る足音が教室へと近づいてきた。

そして、

「藪笠ァァァァァァ！！！！！！！」

鬼の形相の担任、亥下（いしま）　剛（ごう）が教室に突入してきた。

何故担任が突入してきたのかというと鍵谷は男子生徒から男教師に人気でありファンクラブまで作られているのだ。

そして亥下に続いて…

「「「「「「藪笠ァァァァァァ！！！！！！」」」」」」

男子生徒プラス男教師（バカヤローども）の怒号が段々と近づいてきた。

藪笠は舌打ちをしながら窓を開け（二階の窓）足をかけ、

藪笠は、鍵谷に視線を向けると…

鍵谷は涙を目に浮かべながらニヤリと笑っていた。

……

「覚えてろよォォォォォォ！！！！！！」

藪笠は叫びながら窓から飛び降りた。

そしてその後、

「ぎゃあああああああああああああ！！！！！！！」

叫び声が響き渡った。

始まり（後書き）

どうでした？面白かったですか？

あまりお笑い系は書かないのでアドバイスできたら教えてください。

笑み（前書き）

続きを書いて見ました。

笑み

第二話……笑み

四月二十一日
一時間目の休み時間

藪笠は机にへばりつく形で倒れていた。
体のあちらこちらには包帯やら絆創膏が見られる。

言うまでもないが昨日の逃走の際、死にはしなかったもののそれなりの怪我をしたのだ。

しかし以外に体が頑丈な藪笠はそんな事を思い出しながらギラリとある女子を睨む。

鍵谷　真木だ。

話に聞くと男子生徒プラス男教師（バカヤローども）が居なくなった時、転げ回るぐらい笑っていたらしい。

藪笠は思い出しただけでもイライラと眉間にシワをよせるが、

だからといって、やり返してやろうという気は起こらなかった。というか体がダルかった。

藪笠は深く息を吐き窓から見える外を眺める。

すると藪笠に一人の女子が近づいてきた。

「ホント飽きないよね、あんたたち」

女子の名前は浜崎　玲奈。鍵谷の幼馴染みであり学年トップだ。

「俺だってホントはやりたくねーんだけどな……」

しかし体がダルダルな藪笠は浜崎にそう言うと再び息を吐いた。

そして、ふ～ん……と言う浜崎にチラリと視線を向けながら藪笠は思った。

学年トップと下から三十番目の俺では一緒に話していること事態おかしいのではと、

しかし浜崎にとってはどうでもいい事なのだろう。
浜崎はそんな藪笠を見て小さく笑い、でも……っと続けながら何かを言おうとした。

藪笠は、うん？っとその続きに耳を傾けた。

そして浜崎が次の言葉を言おうと唇を動かした、

その時、

ゴン！！

またしても固い固い本が藪笠に直撃した。しかも顔面に……

浜崎は突然の事にキョトンとし、それにうって変わって、藪笠は…

すぅ…っと立ち上がり、目をつぶりながら不適に笑うと…

「鍵谷ィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ！！！！！！」

椅子を蹴飛ばし、全速力で鍵谷に突進して行った。

そして一人だけ残された浜崎は、

いつものバトルロイヤルを見て、はぁ〜…………っと息を吐いた。

しかし浜崎は口元を笑みに変えると、

「（でも……あんたは鍵谷とそうしている時の方が楽しそうに見えるんだけどね…）」

次の授業が始まるまで、藪笠と鍵谷を楽しそうに眺めていた。

そしてその後、現国の女教師にゲンコツを貰い、藪笠と鍵谷が廊下に立たされたらしい……

笑み（後書き）

できたら感想をください。

美術

第三話……美術

四月二十二日
二時間目、美術

藪笠のクラスは只今美術の風景作画を行っている。

皆が作画に集中し、少しの話声があるも、集中できないとまでいかないそんな中…

たった二人の男女が硬直していた。

「……」
「……」

藪笠と鍵谷だ。

そして二人の視線の先には板がある、表面にも絵の具で何かが描かれている。

しかし、

そこに描かれている物は、全く風景とは呼べる代物ではなく…

藪笠のは川を描いたつもりなのだろうがそこに描かれているものは、赤と黒が支配した地獄絵図。

そして鍵谷のは全く風景とはかけはなれ何を描いているのかさえわからないぐらい桃色で染められていた。

藪笠と鍵谷は深刻な表情で、

「……なぁ？」

「何？」

「これどうする？」
「……どうするって…」
「俺は最善の策をやった結果がこれだ」
「……」

藪笠と鍵谷は同時に息を吐いた。

そして刻一刻と時間が休み時間へと近づいていく。

このままでは、二人そろって居残りだ。しかも美術の教師は美術の先生なのですか？と尋ねたいぐらいのフランケンシュタイン教師。さらにネチネチとした性格。

……

藪笠はガックリと肩を落とした。
続いて鍵谷もガックリと肩を落とした。

そうして後残り五分となり。

藪笠はガタッと立ち上がると板を持ち上げ、鍵谷も同じように立ち上がり板を持ち上げた。

そして二人は居残りを覚悟にフランケン教師に描いた板を提出しようとしたその時、

ズルッ

「え！？」
「な！？」

ドォン！！

床に付いていた桃色の絵の具に鍵谷が足を滑らせ、藪笠を巻き込みながらいきよいよく倒れた。

「いったたたた…お前、いきな……り……」
「ご、ごめ……」

そして二人は目を開けお互いどうしを見ると、二人はそろって硬直してしまった。

何故なら、お互いの顔が後数センチだったからだ。

「……」

「……」

藪笠と鍵谷は顔が真っ赤に染まる。

するとそんな光景に呆れたのか、フランケン教師がズンズンと進んできた。

藪笠と鍵谷は、はっ、としながら直ぐ様離れ、同時に板を渡した。

放課後、帰り道

藪笠と鍵谷は茫然とした状態でかえっていた。

あの後フランケン教師に板を渡すと突然、号泣しだしだ。

どうやらあの時、倒れた拍子に板と板が重なり合い、色の重なりにより風景へと変わったらしい。
そして、その風景がとても美しかったのかフランケン教師は号泣したのだそうだ。

そうして、藪笠と鍵谷は結果的に助かったには助かったのだが、

この気まずい雰囲気だけは未だにはれなかった。

飼育小屋（前書き）

久しぶりに書いてみました。でも、ダメ文があるかも……

飼育小屋

第四話……飼育小屋

四月二十六日
昼休み

「飼育小屋？」

昼飯を食べ終え、机に座りのんびりとしていた藪笠芥木は、顔を横に向け、そう一声を上げた。

そして、

「うん。飼育小屋。一緒についてきて」

藪笠の隣では、ニコッと笑顔を向ける、鍵谷真木が、唐突に頼んできた。

「イヤ」

だが、藪笠は断固拒否とした顔をする。

しかし、

「いいじゃん、暇なんだから！」
「イヤ」
「飼育小屋だよ。可愛いウサギとかウサギとかウサギとかいるんだよ！！」
「イヤ」
「カワイイよー！あのクリ！、とした目とか、あのプリティーな顔とか」
「イヤ」

鍵谷は諦めずに藪笠にアタックする。
だが藪笠は、それを絶対拒否という壁で跳ね返し、全く鍵谷の言葉を聞こうとしない。
鍵谷は頬を膨らませ、目に涙を浮かべる。
しかし、藪笠は全く慌てる素振りを見せない。
すると、その時。
鍵谷はあることを閃いた。
「ねぇ、藪笠？」
「あん？」
「先生に、この前藪笠が私に痴漢しようとしたって言っちゃっていい？」

中庭

藪笠と鍵谷は今、二人並んで飼育小屋へと向かっていた。

あの後。藪笠は、鍵谷の脅しに抵抗できなかった。この女なら、間違いなく断った直後、言うに違いない、と思ったからだ。

藪笠は深く息を吐く。

「で？今回は何で飼育小屋なんかに用があるんだ？お前、今まで飼育小屋なんて行かなかったじゃねぇか」

「いや、何か、新しいウサギが飼育小屋に入れられたらしいの」

「新しいウサギ？それって普通のウサギだろ」

「いやいや。私の勘だと、そのウサギちゃんは、絶対プリティーで愛らしいウサギちゃんなんだよ♪」

「……」

テーションＭＡＸの鍵谷に、藪笠は、呆れた眼差しを送りつつ、こんなアホな女のために俺の昼休みは取られたのか…、と肩を落とした。

飼育小屋

藪笠は鍵谷に尋ねる。

「なぁ、鍵谷」

「何？」

「お前さっき、絶対プリティーとか言ってたよな？」
「うん♪」
「後、愛らしいウサギちゃんとか言ってたよな？」
「うん♪」
藪笠は息を吐き、顔を笑顔にし、
そして、

「じゃあ、聞くけど。……あれ、ウサギじゃないよな？」

飼育小屋の中にいるウサギに指をさした。
そのウサギは白い毛で、頬に一筋の傷があり、爪は普通のウサギより断然長く、顔が、めっちゃ怖い…。

「何言ってんの？あれはどこからどう見てもウサギじゃ」
「どこからどう見てもウサギじゃねェェェェェェ！！！！！！！」
藪笠はめっちゃ怖いウサギを力一杯指さす。
「何だよあのウサギ！！普通にモンスターハ〇ターとかに出てきそうだぞ！！」
「そうかなぁ？可愛いと思うけど」
「可愛くねぇ！！むしろ恐ろしいわ！！」

鍵谷は、うーん、でも可愛いのになぁ…、と言いながら、飼育小屋の扉に鍵を差し込む。

あれ……差し込む？

……

「ちょっと待てェェ！？！！」

「何？」

「お前、正気か！？絶対ヤバイって！！ってか何で鍵持ってんだよ！！」

「飼育係に貰ってきちゃった」

「いや、貰ってきちゃったって」

藪笠はあまりの事に、愕然とする。

だが、

「それに……」

次の鍵谷の言葉に藪笠は、

「中入るのは私じゃなくてあんたよ」

地獄を見ることになる。

飼育小屋　室内

「何、この状況？」」

藪笠は飼育小屋のウサギがいる室内の中心に立っている。

そして、藪笠の視線の先には、めっちゃ怖いウサギがこちらをにらんでいた。

まるで、オイ……なに我の敷地またいどんねん…、と言っているようだった。

「あの～……鍵谷さん？」

藪笠は後ろに振り返り、とっとと避難した鍵谷に声をかける。

「どうしたの？」
「俺、出たいんですけど」
「ええ、つまんない」
「いや、つまんないとかじゃなくて…」

「ほらほら、頑張ってね♪」
鍵谷の無責任すぎる言葉に、藪笠は、
いや、頑張ってねじゃねえよ！！てか帰る！！俺、帰るからな！！
と叫び、扉へと歩いて行った。

だが、

「藪笠、後ろ！！」
「後ろ？」

藪笠がそう言われ、後ろに振り返った時。

ドゴッ！！

藪笠は鼻に物凄い衝撃が襲った。

そしてその時、藪笠は見た。

めっちゃ怖いウサギが今しがた、ドロップキックの体勢をしている様を…。

数時間後

「うう……」

藪笠は鍵谷に運ばれ、保健室のベッドで寝込んでいた。
顔には絆創膏があちこち貼られている。

そして、寝込んでいる藪笠の傍らでは、ちょうど用事で保健室にいた、浜崎玲奈と島秋花、さらに今回の元凶である鍵谷真木が椅子に座っていた。

「全く……、ちょっとやり過ぎじゃないの？真木」
「いや、今回は私、何もやってないよ！？」

浜崎は鍵谷にそう問い詰めるが鍵谷はそう言って掌を振る。

浜崎は鍵谷の様子から、嘘はついてないとみて、寝ながら軽くうなされている藪笠に視線を向け、息を吐いた。

すると、島秋が鍵谷に尋ねた。

「じゃあ、藪笠君は誰にやられたの？」

「え！？……いや～……それは……」

……

再び飼育小屋

浜崎に再び問い詰められた鍵谷は、今、浜崎と島秋を連れて再び飼育小屋に訪れた。

「何、あのウサギ…」

浜崎は愕然とした。

そして、確かにあのウサギなら、真木の話は本当だと、思えた。

すると、浜崎は隣で体を震わせている島秋に気がついた。

「どうしたの？花」

「ああ、あ、あれ……」

「ああ、……怖いよね。やっぱ」
「可愛い！！」
「へ？」
「あの顔……プリティー♪」

浜崎は再び、愕然とした。
しかし、その時。浜崎は鍵谷がいないことに気がついた。

そして辺りを見渡した、その時。

「ご飯だよ～」

浜崎の耳に鍵谷の声が聞こえてきた。

浜崎は直ぐ様その声が聞こえた方向に視線を向けると、そこには…。

ウサギ小屋に入った鍵谷が、例のめっちゃ怖いウサギに、ウサギ用の餌を、すり潰し、固め団子状にした物をあげていた。

「ちょっと！！真木！！危ないわよ！」

浜崎は鍵谷にそこを離れろと言うが、鍵谷は一向に離れようとはせず、しまいにはこちらに向かってピースをしだした。

だが、その時。

ドサッ

先ほどまで餌を食べていためっちゃ怖いウサギが突然倒れ出した。

浜崎と島秋は、どうしたのかと、よく、めっちゃ怖いウサギの顔を見ると、

めっちゃ怖いウサギはめっちゃ苦しんでいるウサギにへと変貌していた。

浜崎と島秋は、同時に、え!?と、驚いた声を出した。
すると、めっちゃ苦しんでいるウサギの前に鍵谷はしゃがみ込んだ。

そして、

「今の餌に下剤入れたから、当分苦しいよ」

物凄い問題発言をし始めた。

「私の言うこと聞いてくれたら、私特製のお薬あげるけど、どうする？」

（いや、どうする？て、あんた鬼！？）

（真木……そのウサギをどうするの……）

浜崎と島秋は鍵谷に少し恐怖を感じた。

めっちゃ怖いウサギからめっちゃ苦しんでいるウサギに変わったウサギは、少し戸惑ったが、お腹の苦痛に耐えきれず…、

ついに、わかった。…あなたの言う通りにする、というよう表情を見せた。

その後、めっちゃ怖いウサギは飼育小屋から脱走しどこかへ消えていった。らしい…

競争

第五話……競争

四月三十日
三時間目

絶好の天気に見舞われたその日。藪笠のクラスは体育の授業中であった。
そして、

「今から長距離走るぞ」

体格の良い男性教師、留沢友秋（るいざわ、ともあき）はそう一始めに言った。

この学校では、長距離走や短距離走などの時だけは、男女一緒に走るという変わった規則があり、そのため藪笠のクラスはこの時間、男女一緒に走ることとなったのだ。

周りの男子や女子などが、かくじ準備体操をする中、

「頑張ろ、真木」
島秋は、ストレッチをする鍵谷に話しかける。
だが、
「……」
鍵谷はただ黙々とストレッチをし、全く反応せず。
「真木ちゃん？」
島秋は首をかしげ、鍵谷の肩を揺さぶろうかとまで思った。
すると、その時。
「あー、ほっときなさい、花」
後ろから、腰に手をついた浜崎が呼び止めた。
島秋は、何で？と振り返り浜崎に尋ねると、浜崎は、自分の後ろに指をさした。
島秋はその先に視線を向けると、
「藪笠君？」

そこには、藪笠が立っていた。

だが、そんな藪笠の顔はどこか真剣な表情をしている。

「何か、何週するかで勝ったら今日の昼飯を奢るみたいよ」

浜崎は呆れように息を吐き、はは…、と島秋は苦笑いをした。

すると、その時。

ピィィィ！！

集合の笛の音が耳に入った。

集合となっていた場所は、運動場のはしっこに生えた大樹の下だった。

一周は、ほぼ、一キロといった所だ。

そして、そうこうしているうちに生徒たちは大樹に集合し、

「一について」

藪笠と鍵谷の、飯代をかけた…。

「よーい……」

レースが…。

「ドン！」

始まった。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド！！！！

その瞬間、藪笠と鍵谷は全速力で走り去っていった。
周りは唖然とし、段々と離れていく二人に留沢は、

「あいつら……短距離走と勘違いしてるんじゃないだらうな」

走るルートは運動場から校舎の裏を周り、そのまま運動場に戻るといったもので、藪笠と鍵谷はちょうど校舎の裏手を爆走していた。

「言っとくけど、負けたら昼飯奢れよ！！」
「あんたこそ、負けたら奢りなさいよ！！一杯奢らせてやるから」

だが、

十五分後

「「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」」

「あんたら馬鹿でしょ」

全速力で六キロも走っていればそうなるだろう。

浜崎は呆れた眼差しをペースダウンした二人に向けた。

「藪笠君！！真木ちゃん！！ファイト！！！」

島秋は応援してくれたが、何故かその気遣いが痛い…。

「お、おう……」

「あ、ありがとう……」

そして、藪笠と鍵谷は苦笑いしながら走り去っていく浜崎と島秋をただただ見ていることしかできなかった。

この長距離走は五キロ走りきったら、本人の自由で止めることが出来るもので大体の生徒は五キロで止めるのだが…。

藪笠と鍵谷は、勝負もありもう一キロ走ることを選択してしまった。

そして、最後を走っていた浜崎と島秋はこれで最後だったため、結局。

もう藪笠と鍵谷しか残っていなかったのだ。

すると、そんな時。

「ッ！？」

鍵谷は表情を歪ませた。

「どうした？」

「別に……何もないわよ」

藪笠は振り返り、声をかけるが、鍵谷はいつも通り喧嘩を売るようないきよいでぷいっ、と顔を振り、

「……そうかよ」

藪笠はそんな鍵谷にそう言うとスピードを上げ、目の前の角を曲がり鍵谷の目の前からいなくなり…。

その場に静寂が漂うこととなった。

「……」

鍵谷は走るのを止め左足の足首を見てみると、足首は、内出血をしたらしく青アザになっていた。

馬鹿だなぁ、と呟く鍵谷。

だが、誰もその言葉を聞いてくれる人はいない。

鍵谷は深く息を吐いた。そして一人寂しく、左足を引きずりながら目の前の角を曲がった。

その時。

「ばーか」

曲がった先に、走っていったはずの藪笠が立っていた。

へ？と驚いた表情を見せる鍵谷。

だが、藪笠はそんな鍵谷に背を向け軽くしゃがみ、

「ほら。足ひねってんだろ」

な、な……、と鍵谷はうろたえ反論しようとしたが、いつまでも背を向ける藪笠に負け、素直に藪笠の背中に乗った。

「ッ、重い……」

「ブッ！？う、うるさい！！」

先生や生徒たちがいる大樹についた頃には、既にチャイムが鳴り終わっていた。

「どうしたんだ、鍵谷！」

留沢は鍵谷を背負った藪笠に駆け寄ってきた。その後ろには浜崎と島秋の姿がある。

「あ、こいつ足ひねったみたいで」

「……」

藪笠は鍵谷の状態を留沢に説明し留沢に鍵谷を任そうとしたが、島秋が、私が保健室に連れて行くから、と言い出し留沢はやれやれと息を吐き、島秋に鍵谷を任すことにした。

鍵谷は保健室に向かう鍵谷の背中を見て、安堵の息を吐いた。

若干、顔が赤かった鍵谷が気にはなったが…

だが、その時。

「藪笠」

浜崎がこちらに向かって歩いて来た。何故かニコニコとした顔で、

「な、何だよ、浜崎」

藪笠はそんな浜崎に顔を青ざめる。

「イヤーね、ちょっと」

すると、浜崎は藪笠の目の前でしゃがみこみ…。

そして、

ガシッ！

「ッーーーーーーーーーーーーー！？！！！」

その瞬間。

藪笠は全身を震わせた。

浜崎が掴んだのは、鍵谷と同じ左足の足首だ。

手を離すと、鍵谷に負けないぐらいの青アザができていた。

「やっぱり。はぁー……、ほら、あんたも行くわよ」

そして、浜崎は藪笠に手を差し出しそう言うが…。

藪笠は…、

「ッ……おま、……な……」

涙目で自分の足首を押さえていた。

昼休み。
食堂。

一年から三年まで、多くの生徒が集まり、良い匂いがそこら中から漂う中、

「「で？」」
「うん？」

白い椅子に腰かけて、足首に包帯を巻いている藪笠と鍵谷は、向かい座る浜崎を睨んでいた。

「何でお前の飯代をおごらないといけねぇんだよ！！」
「そうだよ！！玲奈！！」

浜崎にくるようにと言われ来てみれば、今日の飯代を奢れ、と言われ、今抗議の真っ最中なのだ。

だが、学年トップの浜崎にかかれば、

「私、あんたらのせいで、四時間目遅刻したんだけど」
「「……」」

藪笠や鍵谷など、敵ではなかった。

ずーん、と落ち込む藪笠と鍵谷。

すると、

「玲奈ちゃーん」

食堂の開いたドアから、島秋が走ってきた。

「島秋？」

そして藪笠は首をかしげ、鍵谷と同じように、何故、島秋がと思った時。

「ねぇ、玲奈ちゃん。ご飯奢ってくれるってホント？」

二人は島秋の発した言葉に硬直した。

……ご飯、奢ってくれる？

あれ、確か俺たちが浜崎の飯代奢らないといけないんじゃ、……。

どうい事？

「えー、……浜崎さん？まさかと思いますが、まさかじゃないですよね」

「う、うそだよね……玲奈。そんな意地悪なんかしないよね……」

うろたえるのも無理もない。何故ならこの島秋は、あまりの大食いで、噂によると放課後に残った二十品ほどの食堂の料理を一人でたいらげたらしいのだ。

そんな彼女の分まで払うとなると、間違いなく二人の財布は終わる。

藪笠と鍵谷は浜崎に、勘弁を！！、という顔と眼差しを送った。

だが、

浜崎は…。

「ホント♪」

ニッコリとした笑顔を、藪笠と鍵谷に送り返した。

その後…。

食堂の料理が全てたいらげられた、といった噂が、再び学校中広まることとなる。

デート？（前書き）

よかった感想お願いします。

デート？

第六話……デート？

五月二日
朝

土曜日で学校が休みの早朝。
七時三十分

「うーん……」

島秋花は一人、立っていた。

今、彼女がいるのは学校から少し離れた公園の一角。
辺りには犬の散歩をする人や、ランニングをしている男性がちらほらと見える。

だが、彼女は別に公園に遊びに来たわけではない。
ただ待ち合わせがこの公園になったのだ。
そして、彼女が待っているのは、

「島秋ー」

遠くから片手を振って歩いてくる少年、藪笠芥木だ。

「あ、藪笠君」

島秋は手を振って、藪笠に駆け寄る。

「おはよう♪」

「お、おう」

すると、藪笠は言いよどみながら返事をした。

どうしたの？と島秋は首を傾げる一方、藪笠は、

（し、島秋だよな……）

動揺していた。

理由は物凄く単純。

可愛かった。

ピンクの花柄が付いたオレンジ色の長袖に青いスカートの彼女。

普段は子供っぽく見えていたが、私服になると、一変してとても綺麗に見えた。

「で、どこに行くんだ？」

だが、藪笠は顔を反らし彼女を見ないようにする。

顔が赤くなっていることを知られたくないからだ。

しかし、

ギュッ、

「！？」

次の瞬間。
藪笠の顔をさらに真っ赤に染まった。
彼女の手が藪笠の手を握ったのだ。

藪笠はあたふたとしながら視線を彼女に向けると、

「内緒♪」

ニッコリと笑みを見せる島秋の顔があった。

カー、と顔が熱を持った。
そして、藪笠は何故このような状況になったのかと、昨日の事を思い出す。

五月一日
放課後

担任のホームルームが終わり、急ぐ用事があると教室から鍵谷と浜崎が居なくなった時、

「明日デートしてくれない♪」

突如、近づいてきた島秋の一言から始まった。

「……島秋」
「何？」
「熱でもあるのか？」
「ないよ♪」
「そうか…」

ガラガラ（ドアを開けた音）

「俺、ちょっと保健室行ってくる。幻聴が聞こえたみたいだから」

多分ゲームで夜更かししたからだろう。そうだ。そうに違いない、と思い込む藪笠。

だが、

「藪笠君」

島秋はニッコリと笑みを作りながら一言で、

「幻聴じゃないよ♪」

殺気が藪笠に降り注いだ。

「「「「「「「藪笠ぁぁぁぁぁぁ！！！」」」」」」」
「うおっ！？」

カッターナイフ、シャーペン、ハサミ、物差しが藪笠目掛けて放たれる。

しかし、とっさに殺気に気づいた藪笠なんとかその凶器たちから避けドアにズドドドドと凶器が刺さり、

「あ、あぶねえだろうが！？当たったらどうすんだコラ！！」

「ちっ。はずしたか」

今、舌打ちしたやつぶっ飛ばす、と額に浮かび上がった青筋かみをピクピクさせる藪笠。

「藪笠……テメェ、鍵谷、浜崎に続いて島秋花まで」

「に続いてって何だよ！！って言うかさっき舌打ちしたやつぶっ飛ばす！！」

乱闘の末、藪笠は島秋と二人。

デートはめとなったのであった。

「で、どこ行くわけ？」

藪笠は島秋に連れられるがままに今、公園から直ぐ側にある商店街に来ている。
そして、時間も時間、曜日も曜日なわけで人通りが多く、藪笠は周りを気にしながら歩いていた。

内心でカップルに見られないかとドキドキする藪笠。

だが、

「あ！藪笠君、あそこ！！」

そんな考えをぶち壊すのが少女、島秋花なのだ。

「……なぁ」
「何？」

藪笠の目の前には一軒の飲食店が建っている。
そして、その店の直ぐ側にある白い木の看板があり、そこには、

「『男女カップルでの早食いチャレンジ♪』って……もしかして……これのために俺を呼び出したわけ？……」
「うん」

……

ぐるりと後ろに体を向け、藪笠は、

「帰る」

ことにしようとするのだが、

「ダーメ♪」

ガシッと女とは思えない程に腕を握られ、

「痛い！？どんだけ怪力な」

「早く食べにいこう♪」

「って、聞けっ」

「食べにいこう♪」

「無視！？無視なんですか島秋さんっぎゃぁぁあああ！！腕がもげるぅぅぅ！！」

ズルズルと藪笠は島秋に連れられていったのだった。

時刻は昼の一時。

「はぁ……」

藪笠は今、ベンチでダウンしていた。
あの店に入って数分で島秋がビッグサイズの料理を完食したのまではよかったのだが、その後が大変だった。
島秋のあまりの早食いに、その店の店長が対抗心を見せ、数十倍の料理をチャレンジするはめとなったのだ。
そして、関係のない藪笠にも被害が及び…。

「苦しーい……」

こうして藪笠はダウンしていたのだった。

すると、その時。

「はい、バニラ♪」

苦しいって言ってる人に渡しますか、と島秋が直ぐ近くにあったアイスクリーム屋さんから自分と藪笠の分のバニラ、チョコのアイスクリームを買って渡してきた。
だが、渋い顔をしながらアイスクリームを受けとる藪笠。
どうにも断わるに断われなかった。

「はぁー」

藪笠は息を吐きながらバニラを舌でペロッと舐める。

そして。

まぁ少しずつ舐めてたらなくなるだろう、とアイスクリームから舌を離し空を見上げた。

その時だった。

横から、ペロッ、と今さっき藪笠が舐めていた所に別の舌が触れた。

「！？」

舌が来た所に視線を向けると、そこには、

「いただき♪」

ニッコリと笑みを浮かべる島秋の顔が、

「お前ッ！なッ！？」

顔を真っ赤に染まらせ島秋から距離を取る藪笠。

そして、今のは何かの見間違い、見間違い、見間違いだぁぁ！！と

頭で不定しようとした。

その直後。

「へぇー、いい雰囲気ねえ」
「え？」

その声に藪笠の表情が固まった。
どこかで、いや、週に何回も聞いたことがあるような…。
藪笠はゆっくりと視線をその声が聞こえてきた方向に向けると、そこには普段からでは考えられないような服装をした少女と何故か驚いた表情を見せる少女が立っていた。

藪笠はひきつった顔で口を動かす。

「は…浜崎…」
「あ！玲奈ちゃんに真木ちゃん♪」

藪笠と島秋のデートはまだ始まったばかりだ。

デート？２（前書き）

感想お願いします！

デート？2

第七話　デート？2

時刻は昼の一時。

「はーぁ……」

藪笠　芥木は頬をつきながら溜め息を吐いていた。

今、藪笠がいるのは商店街に並ぶ一件のコーヒーカフェ。
室内には男女の客が賑やかに喋りながらくつろいでいる。

だが、藪笠自身は全くくつろげないでいた。
……何故なら、

「花、まさかアンタが藪笠ねらいだったなんてねぇー」
「ちがうよー。ただ藪笠君にちょっと臨時の恋人役になってもらってたの」
「へー……、臨時の恋人役にねぇー……」

浜崎　玲奈、島秋　花、そして鍵谷　真木の三人が自分を置いて勝手に話しまくっているからだ。
さらに、何故か鍵谷からは殺気のような視線を感じる。

ズズッと気まづさを感じる藪笠。
しかし、この場を離れたい藪笠はゴクリと唾を呑み込み、

「……あー、お前ら」
「「「何？」」」
「うっ……」

まさかの三人返事に怯みそうになった。
だが、

「いや、俺ちょっと向こう行ってコーヒー入れてくるわ」

そう言って藪笠は脱兎のごとく彼女たちから死角となるコーヒー入れ場へと逃げる事ができた。

五分後。

「はーぁ……」

藪笠は未だコーヒー入れ場に突っ立っていた。

手にはコーヒーが入ったカップが握られている。

（はぁー、早く帰りてぇ……）

どうにも戻りにくい藪笠は再び溜め息を吐く。

そして、コソッと未だ喋り続けているだろう彼女たちの様子を伺う。

浜崎と島秋が未だにトーク中だった。

何かい吐くのかと溜め息を吐く藪笠。

しかし、その時。

ん？……浜崎と島秋が未だ？……あれ？

誰か一人忘れているような、と藪笠が思った。

瞬間。

「何コソコソしてるのよ」

「！？」

背後の声に藪笠の体が大きくビクッと震えた。

「か、かかか鍵谷ッ！？」

「全く、何してるかと思えばあんたは」

腰に手をつき呆れたように息を吐く鍵谷。

「いや、違うからな！俺は別に戻り」

「最低よね。いくら女の子にモテないからって覗き見なんて」

「ッ！！違う！俺はただお前ら三人トークに入れないから」

「はいはい。言い訳がうまいうまい」

イラッ、と鍵谷の態度に額に青筋が浮く。

そして、我慢を通り越した藪笠は鍵谷に、

「そういうお前こそこんな所でなにしてんだよ！」

「ッ！？」

その瞬間。

鍵谷のさっきまでの余裕な表情が消える。

しかし、そんな事に気づかない藪笠は、

「お前こそ誰か目当てで死角のここにきたんじゃねえのか？」

「ッ！なな何い」

「だったら説明してもらおうか。手にカップも持たずに来たわけを？」

「え……ぁ……」

藪笠の言葉に口を閉じる鍵谷。

勝った、と藪笠は鍵谷に背を向け密かにガッツポーズをした。

そして、まぁ冗談だよ、と伝えようとした藪笠が鍵谷に振り返った時。

そこには、

「……」

赤く染まった顔をふせる鍵谷の姿があった。

何か、俺……言い過ぎた？と顔をふせる鍵谷に動揺する藪笠。

すると、

「……なるの…」
「え？」
微かに鍵谷の小さな声が聞こえてきた。
しかし、何を言っているかわからない。
藪笠は首を傾げ、
「ごめん、聞こえなかった。もう一回言ってくれねえか？」
両手を合わせ頼む藪笠。
それに対し、さらに顔を真っ赤に染めた鍵谷は…。
「……れば……なるの…」
「ん……？」
「……れば……びとになるの……」
「？？」
「ッ！！」
未だ言っている言葉にきづかない藪笠に、ついに鍵谷は動いた。
ズンズンと藪笠に迫り寄り、
「っあ、な！？」
体が当たりそうになる所まで迫った鍵谷は、
「あんたは」

やけくそのように唇を動かした。

「あんたは誰でも頼まれれば恋人になるの！」

沈黙がその場に流れた。

顔を真っ赤に染めながら藪笠を見つめる鍵谷。
あまりの事に目を見開き、茫然と鍵谷をみる藪笠。

……物語は続いていく。

デート？３（前書き）

いまいちです……

デート？3

第八話　デート？3

「か、鍵谷……」

固まる藪笠。

そして、顔面真っ赤の鍵谷。

二人の視線と吐息が交差する。

その時。

「お二人さん」

「「！？」」

その声に二人は体を引き離し、ばっ、とともに距離をとった。

そして、声のした方向に顔を向けるとそこには、

「は、浜崎……」

「花！？」

口元をゆがめ、にやりと笑う浜崎と口に手を当てる島秋が立っていた。

「まさか真木がそんなことを言うなんてね……」
「真木ちゃん…」

二人の視線が鍵谷に集中する。
鍵谷は手を前に出し、

「え？あ、違う！違うから！！」

＞ｉ１３８２３｜１６５９＜

と、言い張るが、

「本当に？」
「ッ！？」

浜崎は藪笠を近くに寄せ、もう一度尋ねる。

「……ぅぅ」
「ぅぅ？」

直後。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！」

鍵谷は泣きながら叫び、逃げた。

「あ、やり過ぎたかな。それじゃ、藪笠。花の事、頼んだわよ」

そして、浜崎もそう言うと鍵谷のあとを追い掛け出ていった。

静寂がその場に漂う。

「島秋……」

「何？」

「……出るか」

「……うん」

はぁ、と重い息を吐く藪笠。

そして、島秋と一緒にレジに向かい、お勘定を払う。

だけのはずだったのだが、

公園

「あぁぁぁぁぁのバカヤロ共おおおおおおおおお！！！！」

藪笠は音量全開で叫んだ。

あの後、レジに行くと何故かそこにマッチョの店長が立っており、

『あの食い逃げた二人分の金、払っていただく』

……

その結果。藪笠の財布はもぬけの殻になった。

「はぁ……」

思い出しただけで嫌になる。
藪笠は肩をガクッと落としベンチに腰を下ろした。

「ま、まぁ。落ち込まないで、藪笠君」

藪笠にそう言葉をかける島秋だったが一向に戻る気配はなく、

「よいしょ、っと」

島秋は藪笠の隣に座った。
そして、

「それに後、一回行くとこ行ったら終わりだから」
「一回？まだ行くとこあるのか？」
「うん！」

……どこ行くんだ？と、まさかまた食べる所ではと眉を引きつりながら藪笠。
すると、そんな藪笠に島秋は、

「それはねー」

ベンチから立ち上がり、手を後ろの腰にやり、

「映画館♪」

にっこりと島秋は笑った。

デート4？（前書き）

やっとデート編終了です。
文が短くて、すいません。

デート4？

第九話　デート4？

「映画館…」

藪笠はその言葉に目を丸くした。そして、もう一度頭で聞き間違いだとし、

「映画館？」

と、尋ねた。

しかし、

「うん。映画館♪」

島秋の言葉は変わらなかった。

『劇場版　食料理人サラ』
藪笠の目の前に立て掛けられている看板に書かれている文字だ。
そして、対象年齢１１歳。プラス一時間半上映。

「……」

茫然と立ち尽くす藪笠。
すると、そこに、

「何してるの、藪笠君？」

手に飲み物を持った島秋が歩いてきた。
しかも、片腕にはビニール袋が通され、中には映画館当たり前のグッズ商品が入っている。

ゆっくりと島秋に振り返り、面白いのか…これ？と尋ねてみる藪笠。

「うん♪」

言葉とともに蔓延の笑みを浮かべられた。
そして、

「行こっ！」

藪笠は島秋に連れられるがままに上映室へと足を進めて行くのだった。

上映内に入ると、中には沢山の親子たちが席に座っていた。
そして、何故か後部座席だけが空いており、

「よいしょ、っと」

藪笠と島秋はその空いて後部座席へと座った。

「……なんで後ろがこんなにがら空きなんだよ」
「？」

藪笠は小さくため息を吐き、

上映が始まった。

どうやら、主人公のサラという少女が挫折しながらも料理の腕を磨きあげる。といったストーリーらしい。

藪笠は肘をつきながら欠伸をした。

上映されてから今ちょうど一時間。

観た限り話は後半へと進んでおり、ある程度観た藪笠の感想からしては、まぁまぁだというものだった。

（何かこの頃のアニメって大人向けが多いよな……）

最初は小学生が見るようなアニメなんて、と思っていたが観ていくと小学生には無理だろうという言語がちらほらと聞こえ、後半からはちょっと過激なラブシーンといった物さえ出てきた。

（もうそういう系でも出さないと視聴率とれないのか？）

呆れながら片手を頬につける藪笠。

そして、早く終わらないかと。ちらっと島秋に視線を向けようとした。

その時、

「ッ！？」

ポテッと島秋の頭が藪笠の肩にもたれ掛かった。

「お、おい！島秋！」

顔を真っ赤にさせ動揺を隠せない藪笠。

しかし、一方の島秋からは、

「すぅ……」

……寝息？

ガックリと一人落ち込む藪笠。

上映が終わるまで後。

島秋の髪からシャンプーの甘い匂いが漂い、それに付け加え、枕代わりとしては気持ちが良かったのか藪笠の肩に頬を擦り付ける。

自身の体が暑くなるのがわかる。

顔を真っ赤にした藪笠はそのまま固まるしか出来なかった。

夕陽が空をオレンジ色に染まる中、

「うーん♪」

河原を歩く島秋は体を伸ばしていた。

そして後ろでは、げんなりとした藪笠がいた。

「面白かったね、藪笠君♪」
「……ああ」
こっちは疲れました。
肩をすくめ島秋の後ろ姿を見てそう思う藪笠。

あの後、やっと上映が終わり緊張感から解放されたは良かったが、
室内の明かりがつくと何故か前部座席にいた親御さまがたの視線の
的になり、急いで寝ぼけた島秋を連れて映画館から離れたのだ。

そういうわけあって色々と疲れた一日だった。

やっと帰れるな…、と息を吐く藪笠。

すると、その時。

「あ！そうだ」

何かを思い出したのか島秋はくるりと藪笠に振り返った。
そして、

「藪笠君」
「ん？」

「今日。ありがとうね、藪笠君」

……へ？

いきなりのことに頭の回転が追い付かない。

「……何が？」

「もぅ……何がって、デート。付き合ってくれたことだよ」

ああ……その事か、と納得する藪笠。

そして、藪笠の返答は…、

「……デートっていうか道連れだろ。ただの」

根に持ってる！？と叫ぶ島秋。

まぁ、当たり前だ。

何せ食べ物目当てにデートに誘われ、さらに胃の限界ですというまで食べさせられたのだ。

ごめんなさい、と舌を出しペコリと頭を下げる島秋。
反省してないだろうとツッコミかける藪笠。
が、その時。

「（…でも……私も、初めてだったから、ちょっとはドキドキしてたんだよ？）」
「え？」

今、何て……。

島秋にそう尋ねようと口を開く藪笠。
しかし、口を開くその前に、

「じ、じゃ、また学校でね！」

ダダダダと一瞬にして走り去っていった。

藪笠は一人ただ立ち尽くすしか出来なかった。

体育？1

第十話……体育？1

五月三日
二時間目

運動場にて、

「ぐはっ！？」

突如、一人の男子が地面に崩れ去るようにして倒れた。
そして、

「ちょッ！？」
「こっちくるギャッ！！」
「藪笠テメぶはッ！！」

死者が増えていく。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁッ」

額についた汗を腕で拭い藪笠は思った。

これ、球技じゃなくて死刑だよな…。

すると、その直後。

「逃げないでよ、藪笠」

一人の女子の声が聞こえてくる。
恐る恐る顔を向けるとそこには長髪の黒髪をサラッと振り、片手にやや固いゴム製のボールを持つ。

「私、普通に藪笠とドッチボール殺りたいんだよ？」

鍵谷真木の姿があった。

数分前。

「どうだった、花。デートは楽しめた？」

「うん！」

現在、教室では島秋と浜崎が昨日のデート話をしている。

そして、その最中では、

『『『『『藪笠！！』』』』』

廊下で一部の島秋ファンに追われる藪笠の姿があった。

学校にくると同時に待ち伏せ、そして、ホームルーム前のチャイムが鳴るまでの長距離マラソン。

チャイムが鳴り、やっと解放されたと藪笠は息を吐く。

そして、いつも通り授業を受けようと教室に足を踏み入れた。

直後。

「……」

後悔という字が頭に浮かんだ。

「映画館行ったの？」

「うん」

楽しそうに喋り合う島秋と浜崎。

そして、その背後で、

バキッ！！とプラスチックのペンをへし折る。

鍵谷真木。

この異常なまでの居心地の悪さに青ざめる藪笠。

すると、そんな藪笠に一人の男子が近づき、

「（おい、藪笠）」

「（な、なんだよ）」
「（お前、鍵谷さんに何したんだよ）」
「（なんもして）」
「（嘘つけ！？お前しかいないだろ！鍵谷さん朝からずっとあんなんでお前が入ってきた直後にさらにアップしてんだよ！！）」
「知るかボケ！！」

どいつもこいつも…、と歯ぎしりする藪笠。

しかし、その時。

ガタッと音をたて鍵谷は椅子から立ち上がった。

『……』

沈黙が室内に漂う。

だが、そんなことはお構い無しなのか、鍵谷は一歩一歩足を動かし、

「うッ！？」

藪笠の目の前に立った。

視線と視線が交差する。

そして、鍵谷は藪笠の顔を見て、

ニコッと笑い一言。

「昨日は随分と楽しかったそうね？」

あの……目が据わってないですか、鍵谷さん。

普段なら機嫌が悪くてもここまでにはならない。しかも何やら異様なオーラまで発している。

後ずさりそうになる藪笠。

すると、ふと藪笠は気づく。

あれ、そういえば他のやつらは？

そーっと視線を鍵谷の後ろに向けると、

『……』

皆が教室の隅っこに避難していた。

……。

逃げ場無しとはこういうことなんだろう、と藪笠は染々思った。

「藪笠」

「はい」

鍵谷は未だニコッと笑いながら藪笠の横を通りすぎ、

「次の授業、よろしくね」

不吉な言葉を残し、教室を出ていった。

「……はい？」

この時、藪笠は知らなかった。

まさか、あんなことになるとは……。

体育？2

体育？2

ドガッ！！
バガッ！！
と、ゴムボールが地面をえぐる。

「はぁ、はぁ、クッソ……」

藪笠は地面に膝をつき、何とか凶器（ゴムボール）を奪い取ることができた。

そして、一方で、

「えー、解説の花さん」
「はいはい！なんですか、浜崎さん？」
「今の状況はいかがだと思いますか？」
「そうですねー、ぶっちゃけ藪笠君の体力しだいですね」

実況解説をしてい、

「って何してんだコラァァァ！！」
「え？」

目を丸くさせる浜崎と島秋。

「え？っじゃねえ！！頼むからあのバカ止めろ！！」
「無理」
「無理だよ」
「……お前らな……」

わなわなと拳を震わせる藪笠。
コイツらの脳天に鉄拳をくらわしてやろか、とまでも思ったが。

しかし、今はそれどころではない。

「……鍵谷」
「何よ」

むっ、と睨みつける鍵谷。
そんな鍵谷に藪笠は、

「この試合、何か賭けしないか？」

賭けを要求した。
理由は簡単だ。

早く終わらせて機嫌を取らす。

「俺が勝ったら今日から1ヶ月、ちょっかいかけてくるなよ」

のってこいよ、と鍵谷を見る藪笠。

一方、藪笠の言葉に顔色を曇らせる鍵谷は、

「……じゃあ」

顔を伏せ、

「じゃあ、私が勝ったら今度の休み、付き合ってよ」

直後。

周りから殺気が吹き荒れた。

「……」

「藪笠、早く」

いや、周りから殺気が、と後ずさりそうになる藪笠。

しかし、そんなこと気にしていても仕方がない。

「わかったよ」

藪笠はゴムボールを固くに掴み、

「おおおりゃぁぁぁあ！！」

鍵谷目掛けてゴムボールが発射された。

しかし、

ガシッ、と鍵谷はゴムボールを体で包み込むようにキャッチし、

瞬時に。

「もらったぁぁあ！！」

藪笠に向かってゴムボールが発射された。

反応が遅い。

とった！！と思った。

直後。

「え！？」

藪笠はニヤッと笑うと、片手でゴムボールを掴みとり、片足を軸に体を回転させ。
刹那に、

「むぎゃ！？」

藪笠からのボールは鍵谷の顔面に直撃した。

照準がずれた。
まさか、肩を狙うつもりが顔面にあたるとは……。
直撃冷や汗をかく藪笠。

そして、一方で

「うにゃぁぁぁ……」

目を回し、そのままダウンした鍵谷。

「……あー」
藪笠はゆっくりと後ろに振り返り、
「これって……俺の勝ち？」

その数秒後。
六十発のゴムボールが藪笠に降り注がれた。

ぎこちない（前書き）

挿絵もいれてみました。
よかったら感想おねがいします。

ぎこちない

＞ｉ２４６９４―１６５９＜

現在、十時三十分。

鍵谷は今、腕時計に視線を向けながら、

「こない」

青筋をたてていた。

今日のために色々おしゃれやら何やらと、頑張りまくった鍵谷なのだが。

前回の体育での際、賭けで普通なら負けていた鍵谷だったのだが、皆から声により（特に女子からの）何故か鍵谷の勝ちになっていた。

「……うー」

考えてみれば藪笠には理不尽な思いをさせてしまったのだろう。

（で、でも！このチャンスを逃すわけにはいかなし……）

悩みに悩み。そして、

よし！！っと握り拳を作り、

（頑張れ、私！！）

一人ただただ待つのだった。

現在、十一時三十分。

「……アイツは」

藪笠はわなわなと震えた拳を手にし。

そして、

「アイツはいつまで待たせるんだぁぁ！！！」

怒号がその場一体に響き渡った。

藪笠は今、待ち合わせの広場に立っている。
約束の場所は間違っていない。
そう、藪笠は…。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ…」

荒い息を吐く藪笠。

待ち合わせからもう一時間は過ぎている。
…考えたくはなかったが、

「まさか、アイツ……」

藪笠は思う。

「隣の広場と間違ってるわけないよな……」

藪笠は携帯を取り出し、電話帳から一人の名前を探す。

そして、目当ての名前。

『島秋』という名前に電話をかけた。

服屋と悲しい瞳

「島秋に感謝しろよ」
「……」
藪笠と鍵谷は今、待ち合わせの公園から離れた商店街を歩いていた。
二人がこうして会えた理由は藪笠が電話した島秋に鍵谷の居場所を教えてもらったからだ。
「はぁ。あの時島秋に電話番号聞いといてよかったな」
「……うぅ」
藪笠は携帯電話を片手に息を吐いた。
「それで、どこ行くんだ？」
「……」
「おい」
「……パ…ト」
「は？」
言いづらそうな表情で鍵谷は顔を赤くし、
「デパート！！」

そして、現在。

「……」

頬をつきながら、藪笠はデパートの休憩所に座っていた。
一方、鍵谷はというと、
「うーん」

休憩所の向かいにある服屋で服を見ていた。

退屈になった藪笠は辺りを見渡す。
どこも、皆一緒で男女の姿が見える。しかし、それにしては数が多すぎだと思った。
すると、その時。

「藪笠」

店から出てきた鍵谷が立っていた。そして、苦笑いをしながら手を合わせ、

……

「コスプレ！？」
「う、うん」

まさか、こんなことになるとは思わなかった。
籔笠と鍵谷は今、服屋の奥の更衣ルームに来ている。
どうやら鍵谷の目的はここでしか入らないオリジナルの服だったらしく、それを手に入れるには店のデザイン中の服を着て店長に見せなくてはいけないといったものだった。

（コイツ…一人だと恥ずいからって、俺をはめやがったな）

じー、っと鍵谷に睨む籔笠。
そして、気まずいのか籔笠に振り返らない鍵谷。
だが、その状態もいつまでも続くことはなく、二人は店の人に指定された個室の更衣室に入る。

「っば！？」

直後。鍵谷が盛大にむせた。
何にというと、それは視線の先にある白と黒のチラチラとした。

メイド服。

「ねぇ、籔笠！！ちょっと助けて！！」

鍵谷は直ぐ様、更衣室から出て籔笠のいる更衣室に向かい。
そして、更衣室のカーテンを盛大に開けた。

「え？」

だが、そこにいたのは、

前髪をふわりと揺らせ、黒い羽織を来た。

悲しい瞳をした一人の男の姿だけだった。

やっとの笑顔（前書き）

やっと書けました。
後、できたらこの話のイラストはゴロページに載してみたいと思います。

やっとの笑顔

その瞳はとても冷たく、孤独のような。

鍵谷は目の前に立つ、籔笠を見てそう感じた。

「……」

沈黙が漂う。

籔笠は小さく息を吐き、羽織を揺らしながら鍵谷の横を通りすぎていく。

そして、店員に連れられ、奥の部屋へと入っていった。

ペタッと、力が抜けたように座り込む鍵谷。

（……籔笠だよね）

別人だった。

そして、今まで知っていた籔笠が嘘に思えた。

そうしていると、

「何してんだ、お前」
「え」
店の女性店員と見覚えのない黒の服を着た籔笠が戻ってきた。
衣装を着たお礼に、店長に貰ってきたのだろう。
「これで良かったんだろ？」
「あ、うん」
鍵谷はさっきの彼と違う籔笠にきょとんとしている。
（籔笠……だよね）
一人、頭を悩ませ悩む鍵谷。
すると、その時、
「鍵谷」
ビクッと肩を震わせる鍵谷。
振り返ってみると、そこにはさっきとはうって代わり。
青筋をたてながら口元を緩ます籔笠が、

「まさか、お前は着ないとかはないよな？」

……。

鍵谷は思い出す。

ついさっき、試着室にかけられていた物を。

「……あ、あはははは……」

……。

ダメ？

その数秒後。

「うにゃあああああああああああ！！」

一人の少女の悲鳴が店内に響き渡った。

そして、時間はたち。

「うぅ」

鍵谷は今、籔笠とともに待ち合わせ場所だった公園に来ていた。
鍵谷の手には大きな紙袋があり、その中にはオリジナルの服が入っている。

「さって、これで終わりか？」
「う、うん」

あの後。
鍵谷なりに頑張ろうとした、つもりだったのだが、服屋の一件や勇気のなさやらでただここに戻ってくることしか出来なかった。

（花のように……）

鍵谷は友達の島秋のことを考える。

無邪気で、可愛くて、そして思ったまま行動する。

そんな彼女が羨ましかった。

「んじゃ、また明日な」

「……」

籔笠はそう言って鍵谷から離れようとする。

鍵谷は何も言えない。

せっかくの今日はこうもあっさりと終わってしまう。

嫌だ。

嫌だ！

嫌だ！！

鍵谷は離れようとする數笠を握る。

そして、

「………待っ」

て、と唇を動かそうとしたその時。

ポッ、ポツ、ザザー、ザアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

「…………」

「……」

狐の嫁入り。

そのワードが籔笠の頭の中に浮かんだ。
肩を落とした籔笠はゆっくりと手を握ってきた鍵谷に振り変えってみると、そこには、

「……」

あまりのことに目を見開き、きょとんとする鍵谷の姿があり。
さらには服のあちこちが雨で透け、危険なことに…。

「…鍵谷」

籔笠は肩を落とした状態で尋ねる。

「家、来るか？」

何でこんな事になったんだろう。
鍵谷は自身の今いる状況を確かめる。

最初に、二階建ての団地のとある一室。
その一室は畳七畳の一人部屋で生活には欠かせない、そんな家具やらタンスやらしか置いていない。

次に、服の脱ぎ、代わりに今日買ったオリジナルの服を着た自分。
上の服には花柄の絵柄が胸元からしたまで綺麗に描かれ、下のスカートは少し短いめの薄藍色をしており、腕にはピンクの花飾りのついたリボンが巻かれている。

そして、最後に、

「タオルならそこにあるからな」

服を脱ぎ捨てた、上半身裸の籔笠が…。

（何でこんな事になってるのぉぉぉぉぉ！？）

頭を抱え、一人もだえる鍵谷。

「…お、おい、大丈夫か？」

「はッ！？ただだ、大丈夫。大丈夫だから！！」

慌てて、籔笠にそう言いつつ距離を取る鍵谷。

しかし、籔笠の視線は全く離れることはなく、

「な、何？」

おずおずと尋ねる鍵谷。

一方で、いや…、と籔笠は視線を窓の外に向ける。

そして、小さな声で、

「（似合ってんじゃねえの…）」

「え？」

「あ、いや、なな何も言ってねえよ！！」

「で、でも今…」

「い、言ってねえ！！」

顔を赤くし、抗議する籔笠。

しかし、鍵谷はさっきの言葉を危機逃さなかった。

『似合ってんじゃねえの…』

「籔笠」

「な、なんだ」

未だ顔を赤くさせながら振り返る籔笠。

そんな籔笠に鍵谷は言う。

「ありがとう♪」

こうしてこの後、直ぐに雨は止み、鍵谷は帰っていった。

そして、この直後。
籔笠の地獄の明日が決定した。

悩みと追い詰められて？（前書き）

感想お願いします！！

悩みと追い詰められて？

「うー」

悩む。

鍵谷真木は今、頭を抑え唸っていた。

今、鍵谷は教室の隅っこの席で座っている。

そして、さらにいうとある一枚の紙を睨んでいた。

それはあくまでも普通の生徒なら貰うはずの、

「普通はこんなの貰わないでしょ」

そこで、浜崎のキツいお言葉。

「む、もっ貰うよ！」

「いや、普通に学園生活を送ってたら貰わないわよ」

それも、と浜崎は続け、

「赤点注意の警告書なんて」

うぅ、と気まずい表情になる鍵谷。

普段から学校の中で有名な鍵谷だったが、ただ一つ欠点といえる物があった。

そう、それは『勉強』。

男性教師たちにとってもそんな鍵谷を助けてやりたいと思っていた。だが、女性教師たちからのその冷酷な視線による監視により動くことができず、こういう形で鍵谷に今の自分の状況を理解してもらおう、とした。

そして、今にいたるわけなのだが。

「玲奈、何とかならない？」

「無理」

「ちょこっと。ちょこっとだけ教えて」

「その言葉は聞きあきた」

全拒否を貫く、浜崎。

肩を落とし、大きな溜め息を吐く鍵谷は涙目な目線でチラリと浜崎の顔を除いた。

すると、さっきから会話していた浜崎は全くこちらを見ていなかった。

じー、と浜崎は向こうの席を見ている。

何見てるの、と視線を向こうに向けるとそこには、

「だ……大丈夫、籔笠君」
「む……無理……」

今にも倒れそうな籔笠と、手にジュースを持った島秋の姿があった。

（…いいな……花は）

島秋花は浜崎までとは言わなくても、成績は優秀だった。
そう、見た目からは全く想像できないくらいに。

浜崎と同じように茫然とその光景を眺める鍵谷。

すると、その時、

「ねぇ、真木」
「え？……な、何？」

籔笠たちを見ていたことを隠そうとして苦笑いをする鍵谷。
そして、そんな彼女に浜崎は口元を緩ませ、

「明日休み、勉強教えてあげるからアンタの家に行ってもいい？」

……。

何だろう、物凄く嫌な予感がする。

彼女からの言葉に鍵谷は息を飲み込む。

もし、『いや』と答えたらどんな目に会わされるか…。

「い、いいよ…」

しぶしぶ、眉を潜めながら浜崎の提案を了解する鍵谷。

そして、その返事をもらった浜崎はニコッと笑ったのだった。

翌日。

「おはよう、真木ちゃん！」
「……」
「ふふ♪」

何だろう、何で花まで一緒にいるのだろう。

玄関の前で額に手をあてる鍵谷。
そして、浜崎にまさかと思いながら尋ねる。

「ねぇ、玲奈」
「何？」
「まさかと思うけど、アイツも呼んでたりしないよね？」
「アイツ？誰のこと？」

「……」

まぁいいじゃない、と笑いながらかってに家に上がる浜崎。
鍵谷はそんな浜崎を睨みながら、思った。

（信用できないいいいい！！！）

出会いは突然と（前書き）

感想お願いします。

出会いは突然と

「そういえば、ねぇ、真木？」
「……何？」
「ん？何怒ってるの？」
「……別に」
「れ、玲奈ちゃん。多分、さっきから玲奈ちゃんが勉強教えてあげないからだよ」
「ん？そうなの？」
「ふん……（カキカキ）」
「真木……」

「そこ、全部間違ってるわよ」
「ふにゃあああああああああ！！」

昼一時。

「浜崎のヤロー…」

街中から少し離れた辺り一面の畑沿い。
そんな町外れな道を籔笠は一人歩いていた。

「大体、何で俺だけがこんな目に」

籔笠はぐちぐちと喋りながら片手に握る一枚のメモ用紙を見ている。

「……」

そこに書かれているものはどこかの家を示す地図。

昨日、浜崎にここに行くようにと言われ現在向かっているのだ。

『断ったら分かってるわよね』

という脅しつきで……。

はぁ〜、と息を吐く籔笠。

だが、別に部屋にいてもやることがなかったからまぁ暇潰しにはなった、と籔笠はちょうど家並みが見え、その角を曲がった。

と、その時。

「わっ！？」

「ッ！？」

ドォン、と後ろに倒れる籔笠。

いつっ、と手を地面につき前を見ると、そこには一人の女性が同じように腰をつき倒れていた。

ちょうど、同じように反対方向から曲がろうとしてきた女性にぶつかったのだ。

「あ、すいません！？だ、大丈夫ですか？」

籔笠は直ぐ様、女性に駆け寄り、手を差し伸べた。

「いえいえ、こちらこそすいません」

そして、女性の手を掴み籔笠がそのまま女性を起こそうとした。

だが、

「白刃さん」

「！？」

その瞬間。籔笠の動きが止まった。

そして、ゆっくりと女性に視線を向ける。

茶髪のストレートな髪に痩せた細腕。
大きな胸はあまり見ないようにして、籔笠は慎重に尋ねる。

「な、なんでその名前」
「ん？」
「？」

女性は眉を潜めながら籔笠に顔を近づけていく。籔笠は焦って後ろに下がるが、

「ねぇ、君。もしかして白刃さんの息子？」

「……ああ」
「そっか、いやーあまりに似てるから驚いちゃったよ。ごめんね」
そう笑う女性に籔笠は目を点にした。
「あ、アンタ、一体」
「あ！そうか自己紹介がまだだったわね」
女性は腰に手をつき、口元を緩ませる。
「私の名前は鍵谷　藍」
「……」
「ん？どうし」
「鍵谷……」
「？」
籔笠は頭に手をのせ、思った。
何かややこしくなるような予感がする、と。

繋がりと秘密（前書き）

よかったら感想、一言でもいいんでお願いします。

繋がりと秘密

「私は真木の母方のお姉さんなの」

今、鍵谷　藍に連れられ籔笠はある家の廊下を歩いていた。

数分前。

「ここが私の家よ」

藍に連れられて来た籔笠。

そして、最初に目に入ったのが大きな屋敷といった昔々の家だった。

さらに、見慣れた自転車が二代も付き添いで。

「……」

「どうしたの？さぁさぁ、入って」

籔笠は藍に言われるがまま入る、と。

そこには、

「何で、アンタがいるの？」
「……」
仁王立ちする鍵谷　真木。
大体、検討はついていた。
鍵谷の後ろには顔をちょこっと出す島秋と浜崎。
溜め息が籔笠の口からこぼれた。

しかし、そんなことがあったが何故か藍の、ちょっと用事があるから、という言葉により三人はおとなしく部屋へと戻っていった。
怒らせたら怖いのか？と考え込む籔笠。
「高校時代からのクラスメートだったんだよ」
「え？」
「だから、あなたたちの親のことよ」
聞いてた？と視線を向ける藍。

籔笠はコクコクと頭を頷かせ、何故か冷や汗をかいた。

そして、どうやら目的の場所にたどり着くといったその時。

「……ねぇ、芥木くん」

藍は足を止めた。

その瞬間、今までの藍の空気が変わったことが直ぐにわかった。

藍は籔笠の目を見て、唇を動かし、

「白刃さんはどうしてるの？」

冷たい空気がその場を支配した。

籔笠は、藍のその問いに口元を緩ませ。

そして、答える。

「……死んだよ。ちょうど、俺が3歳だった時に」

「……そう」

藍は目を閉じそう呟くと直ぐそばにあったドアを開けた。

「……ここは」

籔笠の目に入ったのは部屋一体に配置された本棚。

「ここには資料やアルバムがいっぱいあるの」

藍はそう言うと、一つの本棚から一冊の本を取り出し、ページの一枚を開き籔笠に見せた。

「君のお父さんよ」

「……」

籔笠は渡された本に貼られた一枚の写真を見る。

そこには一人の自身に似た少年が写っている。

そして、その隣には見覚えのある黒髪の少女、

「…この人が鍵谷の」

「……ええ」

鍵谷真木に似た少女をじっと見る籔笠。

最初、藍に自分の父親について教えてあげると言われ、ここまで来た。

そして、籔笠と鍵谷には親からの繋がりがあることを知った。

しかし、籔笠には藍が本当にこの事を教えるために自分を連れてきたとは思えなかった。

「藍さん。そろそろいいんじゃねえのか？」

「え？何を」

藍は籔笠に振り返りその続きを言おうとしたが、

そこには。

籔笠芥木はいなかった。

いや。

今まで見ていた籔笠芥木はいなかった。

藍はそんな籔笠を見て一度目を閉じ、そして真剣なまるで子を心配する親のような眼を開き、

「芥木くん」

藍は、

「あなた、もしかして……」

言う。

「　　」

静寂が漂う。
そして、籔笠は藍に尋ねられた問いに対し、

「ああ」

それだけだった。
そう答えるしかなかった。

「……」

藍は籔笠の返答に、そう、と目を閉じた。

そして、籔笠に藍は唇を動かし言った。

「それが、あなたの本当の顔なのね」

気になる。

鍵谷　真木は今、頭を悩ませていた。

あれからもう三十分。

「むぅ〜〜〜〜！！」

「……ちょっと、落ち着きなさいって」

「そうだよ、真木ちゃん」

浜崎と島秋はそう言うが、

「無理！！だって藍さん鈍いし、年取ってるくせに体つきなんてエロいもん！！」

「いや、年取ってるってアンタ……あ……」

「それに籔笠だよ！藍さんの美貌に我慢できずに襲ってたらと思うと！！」

「いや、籔笠くんに限って……あ…」
「信じられない！！だってあの二人だよ？あのバカアホ間抜けの籔笠と鈍感色気まんさいの藍さんだよ！むぅぅぅぅぅ！！」

頭を抱え、嘆く鍵谷。

だが、そこで気づく。

目の前で青ざめる島秋と浜崎。

そして、よくよく感じる殺気。

ゆっくりと後ろに振り返る鍵谷。
そして、そこにいたのは…。

「誰が鈍感の年取ったお姉さんって？」
「誰がバカアホ間抜けの俺だって？」

ポキポキと指を鳴らす、籔笠と藍の姿が。

……。

鍵谷はゆっくりと我が友に助けを頼もうと振り返る。

しかし、

そこには手を合わせ。

鍵谷の帰還を祈る二人の姿が。

……。

「うにゃあああああああああああ！！」

その日、その屋敷から鍵谷の悲鳴が響き渡った。

繋がりと秘密（後書き）

出来たらイラストも自身のホームページに出したいです。

囁きの始まり（前書き）

一応、ユーザー指定を解除しました。多分、ログインしなくても感想は書けると思うので

よかったら感想お願いします。

囁きの始まり

春の終わりに差し掛かる一日前。

「はぁ、はぁ、ほ、本部……応答を！本部！ほんぐはッ！？」
『おい！どうした、おい！！返事をしろ！！お』
「残念。もう出ねぇよ」

『！？』

「こそこそと察が動いてると思ったらまさかなスパイとはＦＢＩかよ、全く」

『く……貴様……』

「ニヒヒィ……よく聞け、察ども」

「明日、俺達は一年の歳月を経て動き出す」

そう……。

「スコーピオンがなぁ！！」

「はぁ……」

籔笠は息を吐く。

時間はちょうど昼休み。

皆が騒ぎ合うこの時間、籔笠は一人屋上でパンをくわえていた。

屋上から下を見下ろすと、そこには桜がパラパラと落ち、春の終わりを感じさせる。

籔笠は息を吐きつつ、

「春も終わりだなぁ」
「そうだねぇ」

……あれ？

籔笠はゆっくりと首を動かし、そこにいなかったはずの人物に尋ねる。

「島秋、何してんだ？」
「ん？籔笠こそ、何してるの？」

……。

籔笠と島秋は今、屋上から三階に降りる階段を降りている。

「どうしたの、籔笠くん。今日は一段と変だよ？」

「おい、一段とってなんだよ。お前から見て俺ってどう見えてんだ？」

籔笠は小さく息を吐きつつ、島秋にそう問いながら、

ピタッ。

「ふぇ！？」

「お前こそ、目にクマできてんぞ。バイトでもしてんのか？」

突如、顔を触られた島秋は目を丸くし顔を赤く染めた。

だが、その顔にはそれ以外に驚きも含まれていた。

硬直する島秋。

だが、直後。

ギシッ、と。

音とともに籔笠の体は斜めに傾き、幸い階段を降りきる三段前にいたお陰で階段三段の高さから落ちた。

そして、突然のことに固まる島秋の側には、

「何、花に手出してるのよ」

眉間にシワをよせた鍵谷真木の姿があり。

さらには、

「「「「籔笠ぁあぁぁぁぁぁぁあ……」」」」

島秋ファンのバカどもまでもが、

…………………………………。

答えは直ぐに出た。

「…………ッ！！」

全力疾走。

「逃げたぞ！追え！！」

「逃がすな、あのナンパ野郎を逃がすな！！」

「二階の仲間に連絡しろ。挟み撃ちだ！」

ギャアギャアと騒ぎながら走り去っていく男達。

鍵谷は笑顔で手を振り、島秋は今だに硬直していた。

翌朝。

朝の５時。

「ふー……」

帽子を被った少女は一人、新聞の入った鞄を背負い走っていた。

道はちょうど上り坂で、走るにしても体力は大幅に削られる。
両膝に手をつき、荒い息　を吐く少女。
すると、顔の近くに茶の入ったペットボトルが出され、
「ほぃ」
「あ、ありがとう」
ゴクッゴクッ、と。
一気に渡された茶を飲み込む。
……あれ？
バッ！？と直ぐ様後ろに振り返る少女。
そして、そこには、
「生き返りましたか、島秋さん？」
イタズラっぽく口元を緩ませる籔笠が立っていた。
「は、ははぁ……」

「生活費のため、ね…」

籔笠と島秋は今、近くのベンチに座っていた。

新聞配達を何とか終えた島秋は籔笠が買ってきてくれたパンを頬張っている。

「お前、いつもこんなことしてるのか？」

「ん？ゴクッんっと、違うよ。ちょっと事情でお父さんが居ないから」

「いや、居ないからって親父さんから生活費とかもらってねえのかよ」

「ううん、違うの。私からいらないって言ってるの」

「は？」

よいしょ、とベンチから立ち上がる島秋。

「お父さんには私の事は気にせず仕事に励んでほしいと思ってるか

ら」
「いや、でも」
「私は私で何とかするし、それに今日お父さん帰ってくるから」
「……」
籔笠はそんな笑う島秋を眉を潜め心配な表情で見る。
すると、島秋はキョトンとした顔で、
「籔笠くんって」
「ん？」
眉を潜める籔笠に対し、
「そんな顔も出来たんだね♪」
……カチン。
「人が心配してやってるのにコイツわ」
「いひゃ、いひゃいいひゃい！？」
ぐにぃ、と島秋を頬を引っ張る籔笠。
額には軽く青筋がたっていた。
そして、涙目の島秋は何とか籔笠から解放して貰うと、赤くなった

頬を擦りつつ笑い出し。

籔笠も呆れたように息を吐きつつ、口元を緩ませた。

ちょうど、その時。

「おーい、花！」

「え？」

「ん？」

遠くからの声に振り返る島秋と籔笠。

視線の先には灰色の皮ジャンをきた中年の男が見え、さらに石につまずき地面にこけた。

……。

籔笠は、何となくわかった、と島秋に振り向き、

「あれって、親父さん？」

「う、うん。まぁ……」

島秋は苦笑いするしかなかった。

囁きの始まり（後書き）

次回。

「急展と絶望と……」

急展と絶望と

「花の父親の島秋正木です」

今、籔笠は島秋家族に連れられて島秋家に来ていた。

木製の古い二階建ての家。
お年寄りが住んでそうな八畳の畳に卓袱台。

そんな内装に小さく唸りつつ、お茶を飲む籔笠。

「それにしても君が籔笠くんか」
「え？」
「いや、花がよく君の名前を言うからどんな子かとお」
「ち、ちょっと！お父さん！？」

台所から和菓子を持ってきた島秋が慌てて駆け寄ってきた。

「なに言ってるの！止めてよ！？後、気にしないでね、籔笠くん」

もぅ余計なこと言わないでよ！と父親に向かって指差し再び台所に戻る島秋。

「島秋のやつ、楽しそうだな」
「？」
目を丸くする正木に対し籔笠は口元を緩ませ、
「学校でのアイツの顔はいつも見てるけど、今は普段以上にうれしそうな顔してるんですよ」
「……そうなんですか？」
「……ま、まぁ、俺から見たらなんだけな」
顔をポリポリとかく籔笠。
正木はそんな籔笠に笑みを見せ、
「……私は花に君みたいな友達がいてくれてよかったと思うよ」
「え？」
「あ、いや、気にしないでくれ」
正木は笑って、後ろに立てられた写真たてを見た。
正木、花、そして花に似た女性の姿が写された写真。

「お邪魔しました」

玄関を出て、お礼を言う籔笠。

「また、来てね」

花は口元を緩ませ籔笠を見送りにきた。

すると、

「ちょっと、いいかな」

花の側にいた正木が呼び止めた。

「……」

籔笠は正木と共に近くの通りを歩いていた。

「いや、すまないね籔笠くん」

「あ、いや別に気にしてないですから」

籔笠は笑いながら、空を見上げる。

沈黙がその場を冷たくする。

だが、その

「四季装甲」

一言が冷たさをさらに強める。

「……」

「……やっぱり、そうか」

正木は口元を閉じ、簀笠を見る。

「君が何故こんな所にいるのかは聞かないよ」

「……」

「……だけど、君に知らせておこうと思ってね」

「お父さん」

花は家の向かいにある電柱の側で父、正木が帰ってくるのを待っていた。

「花、何しているんだ？」
「何って、お父さんを待っていたんだよ」
「ああ、そうか。悪かったね」

正木は苦く笑いながら花の頭を撫でた。
花も口元を緩ませ、頬を赤らめる。

「さぁ、家に入ろうか」
「うん」

そして、二人は家へと一歩二歩と進めた。

その刹那。

キキィィィィィィィィ！！と。

音の後に。

ドゴッと鈍く生々しい音が平穏な生活を絶望へと変えた。

動き出す心

絶望。

幼い頃にお母さんを亡くし、その悲しみを隠しながらお父さんと生きてきた。

お父さんだけが私のたった一人の繋がり。

とても、大切な……。

……

時間は午後九時。
今だ寒々しい冷えた夜の緊急病棟。
通路は暗く、唯一、光るのは手術中とかかれた照明がある集中治療室。

そして、集中治療室の扉から少し離れた所に複数の人影がある。
「花……」
鍵谷真木、浜崎玲奈、そして顔をふせ一言も口を開かない島秋花だ。
さらに、向かいには籔笠芥木が壁に背をつき島秋を見ていた。

知らせは直ぐに届いた。
事件は籔笠が島秋正木と別れてから数分後。

島秋正木は、自宅前で突如向かってきた車に衝突した。
咄嗟の判断で、娘である島秋花を突き飛ばし、彼女は軽い擦り傷で済んだ。

だが、その代償はとてつもなく大きかった。

運ばれてから一時間は経つ。
今だ手術中とかかれた照明は消えない。

皆が島秋正木の無事を願う。

そんな中、

「お取り込み中にすまない」

その声と共に、通路奥からコツコツと音をたて、誰かが歩いきた。
そちらに視線を向けると、そこには一人の中年男が立っている。
男は胸ポケットから手帳らしき物を取り出し、

「警察だ」

警察手帳を皆に見せながら、男は島秋の前で足を止めた。

「……島秋　花さんだね」

男は手帳を開き、今の彼女の状態など関係ないと言わんばかりに話しかけようとする。

「ち、ちょっと！まさか今の状態で事情聴取するつもりじゃないわよね！」

浜崎は島秋を守るように前に立ち男に抗議する。だが、男の顔にはこれといって変化はなく、平然とした表情で浜崎を睨み付け、

「……退いてくれないか？仕事の邪魔だ」

その言葉に苛立ちを覚えた浜崎。
だが、

「ふざけないでよ！！」

その反応よりも早く、鍵谷は男に詰め寄り怒りを露にした。

「いくら刑事だからって、人の気持ちを何だと思ってるの！」

大切な人を亡くした苦しみ。

それが今、直ぐ目の前まで来ている。

その気持ちを知っているからこそ、こんな横暴な言葉が許せない。

鍵谷は男を睨み付け、さらに言葉を口にしようとした。

「君は確か、鍵谷真木、さんだったね」

「！？」

だが、突如。

その言葉に口を閉ざしてしまった。

「そっちは浜崎玲奈」

「！？」

男は浜崎を睨み、手帳を一枚めくり、

「君みたいなお嬢様がこんな所にいるとは、私にはそちらのほうが疑問に思うよ」

「……」

浜崎は眉間を寄せながら、頬には密かに汗が流れ出していた。

さっきまでの立場が逆転した。

「悪いが君たち見たいな子供の相手をしているつもりはない」

男は息を吐き、今度こそ島秋に尋ねる。

「君が知っていることを教えてくれないか」

「……」

「車の特徴、運転していた男の顔、何でもいい」

「……」

「父親の仇をとりたくないか？」

「……」

静寂がその場にこだます。

島秋はいくら問いかけられても一行に口を開かない。

目の前で父親が跳ねられ、さらには母親を亡くしてる。

そして、今その父親の命すらどうなるかわからない。

少女にとってこれ程の痛みはない。

これ以上の問いかけは少女の精神を苦しめる。

そんなことは誰もがわかっていた。

そして、だからこそ意識させてはならなかった。

だが、

「君の母親、島秋　加織さんの死にも繋がる……と言ってもダメかな？」

「！！」

その瞬間、島秋の肩がビクッと大きく動いた。

母親の死……

車

特徴……

男……犯人……母親父親母親母親母親母親！！

「あ……あぁ……ぁ……ッ！！」

定まらない声が島秋の口から発せられる。

ガタガタ、と体を震え出させ頭を押さえ出す島秋。

「は、花！！」

「落ち着いて！大丈夫だから、気をしっかり！」

鍵谷と浜崎が急いで島秋を抱き締め、落ち着かせようと動く。

…駄目だな、と男は息を吐いた。

そして、島秋に一言も無くただ振り返り歩き出す。

無駄なことはしない。

まるでそう言っているかのような後ろ姿。

だが、直後。

ドオン！！、と。

その場を一瞬に沈めるほどの音が放たれた。

「な、何！？」

鍵谷たちはその音に直ぐ様、振り返る。

そして、その視線の先には、

「……な、何のつもりだ……」

「……」

男の目の前に立ち、右拳を壁に叩きつけ、行く手を阻む。

籔笠芥木の姿があった。

「……別にアンタが間違ったことをしている訳じゃない」

籔笠は拳を壁から放し、一歩。

「…アンタが捕まえようとしているスコーピオンを捕まえたければ使えばいい」

ポケットから古びた手帳を取り出し、籔笠は男に向かって無造作に投げつけ、さらに一歩。

「だけどな……」

「……ッ！？」

「これ以上、俺の周りで俺に関わるやつを苦しめるなら」

籔笠は男の胸ぐらを乱雑に掴み上げ、

「お前もスコーピオンと同様に消してやるよ」

直後。
その場にいた皆が一瞬の殺気で凍りついた。
それは今までいたこの場に突如現れた。

そう、いてはならない何かが現れた。

まるで、そういったものだった。

「警察を、あまり舐めるなよ」

それが男の去り際の言葉だった。

あれから、数分が経つ。

「おい、島秋と浜崎は？」

皆の分の缶ジュースを買って戻ってきた籔笠は、そこに座っていた鍵谷に尋ね、手にあった飲み物を渡した。

「お手洗いだって」

そう答えた鍵谷はそれを受けとると、まだ飲む気になれないのか両手で持ったまま顔を伏せる。

籔笠は一息つき、後の飲み物を横に起きながら鍵谷の隣に座った。

「ねぇ、籔笠……」

「……何だよ」

籔笠は天井を見上げながら、缶ジュースの蓋を開ける。

「……大切な人が目の前からいなくなる、って……どう思う？」

「……」

「……私はお母さんを亡くしてるんだ。……って藍さんから聞いてるんでしょ？」

「……ああ」

やっぱり…、と鍵谷は小さく笑い、

「私には藍さんもいるし、みんながいるから……気持ちが折れることはないと思う……」

「……鍵谷」

「だけど……」

鍵谷は両手にもつ缶ジュースを見つめながら、慎重に言葉を考え、

「……花にはお父さんしかいないんだよ。どれだけ、私たちのまえで笑顔を振る舞ってても、花には……」

…そう言って口を紡ぐ鍵谷。

籔笠は島秋の家に行った時の島秋花の顔を思い出す。

いつも、笑顔を振る舞い。

一番に気を使ってくれ。

こんな俺にも、気を使ってくれている。

「……だ」
「え……？」
「辛いに決まってんだろ……」

籔笠は目に手を載せ、そう言ったきり口を開けなくなった。

鍵谷もそんな籔笠に合わすように喋らなくなった。

そして、一、二分と時間が経つ中。

「あれ、花は？」

手洗いから帰ってきた浜崎の言葉に籔笠と鍵谷は顔を上げた。

「え、何言ってるの？玲奈と一緒じゃ」

「いや、花は先に行くって言って…」

浜崎の声がわずらう。

嫌な予感が三人の中に抱いた。

精神的に危機的状態にも関わらず、行方を眩ました島秋。

まさか、と籔笠は呟く。

もし、島秋があの時。
車を運転していた男を見ていたら。

もし、そいつの顔に見覚えがあるとしたら。

もし、そいつの居場所を知っていたとしたら。

その瞬間。
籔笠は歯噛みし、
「クッソ！！」
直後、走り出そうと足に力を入れた。
だが、
「ちょっと待って！！」
「ッ！？」
そんな籔笠の腕を浜崎は掴む。
間髪いれづに怒号を飛ばしそうと振り返る籔笠だったが、
「お願い。私は警察に電話するから、もし花を見つけたらちゃんと電話して」
「ッ……」
「玲奈！わ、私も」
「ダメよ。真木は花の家に行って花を探してきて。居なかったらその場付近を見て回って！」
「……ッ」
そう言われ、口を紡ぐ鍵谷。
しかし、心境は納得がいかないといった物だった。
だが、浜崎も思いつきで言っているわけではない。
今、この中で一番に冷静さを保っているのは浜崎だ。

「籔笠……」
浜崎は鍵谷から籔笠に視線を向ける。
そして。
この時、籔笠は気づいた。
浜崎に捕まれている手が震えている。

どれだけ、冷静な表情をしていても不安で仕方がない。
だが、その心を押し殺し。
籔笠に伝えようとしたている。

その気持ちが伝わってくる。

「浜崎」
「え？」
籔笠はもう片方の手で浜崎の手にそっと添える。

「心配するな。島秋は絶対に見つけてくる」
「籔笠……」
「鍵谷も、心配するな」

「……」

籔笠は口元を緩ませ、浜崎の手をそっと離させ、

「じゃあ、行って」

「待って、籔笠」

突如、鍵谷が籔笠を呼び止めた。

背を向ける顔だけを鍵谷に向ける籔笠。

「……ッ」

顔を伏せ、押し黙る鍵谷。

震える手をぎゅっと片手で掴み、祈るように胸に手を置き、

そして、

「……花のこと、お願い」

「……わかってるよ」

籔笠は小さく口元を緩ませると背を向けながら歩き出す。

そして、籔笠は最後に聞こえるか聞こえないか、といった声で、

「…ついでにもう一つも終わらしてくる」

その言葉を残し籔笠は走り出す。

友を助けるために…。

全てを終らすために…。

終わる夜（前書き）

一応、何とか書けました。
よかったら感想お願いします。

終わる夜

「そっちはどうだった？」

携帯を手にそう尋ねる籔笠。
対話の相手は鍵谷真木だ。

あれから一時間が経ち、今だ行方をくらました島秋を見つけられていない。

『ダメ、どれだけ探しても見つからないの』

そうか、と籔笠は小さく息を吐く。
携帯のほうからは鍵谷の荒い息が聞こえてくる。
鍵谷も必死に島秋を探して走り続けていたのだろう。

空を見上げながら小さく息をつき、

「鍵谷、浜崎に電話してくれるか？」

『え、何で』

その言葉に疑問を投げ掛けようとする鍵谷。だがそれを遮り、

「島秋のいる所は大体検討がついた」

その瞬間、鍵谷の驚いた声が聞こえてきた。
しかし、そんな鍵谷にかかわらず籔笠は慎重に口を動かす。

「ただちょっとばかし警察の手もいりそうだから」
『け、警察……って…ちょっと、まさか』

鍵谷の声が一瞬にして暗くなる。
今回の島秋の行動の原因は恐らくあの警察だと名乗った男が言った一言。

「ああ、……何とか島秋だけでも助けるから警察呼んどいてくれよ」

そう言って携帯を切ろうとしする籔笠。
だが、

『籔笠』
「？」

やけに大人しい声に籔笠は切る手を止めた。

また騒ぐと思い通話を切ろうとした籔笠だったが、それが一転して違った反応だった。

沈黙が暫く続く。

そして、

『……怪我、しないで……』

その声はとても弱々しかった。
何となく鍵谷の気持ちが理解できた。

悔しさ。

無力さ。

わかった、と言って籔笠は携帯を切る。

そして、籔笠は携帯をポケットに戻すと、視線の先にある廃墟となったビルを見上げ、

「怪我なんて……するわけねえだろ」

廃墟したビルの奥の奥。
そこは食堂だったのだろう。
折り畳み式のテーブルが片隅に置かれ、広々とした広場に数十人の人影が集まっていた。
そして、その集まりの中心にいた男は避けたような笑みを浮かべ、

「よぉ、嬢ちゃん」

目の前から歩いてくる少女、島秋　花を向かえ入れた。
総勢十二人の男たち、その口元には笑みが見える。

「……」

「おいおい、そんな怖い顔するなよ」

中心たるリーダーらしき男は立ち上がり、両手を開きながら島秋に近づく。

しかし、島秋は、

「こないで」

服の中からある物を男に向けた。

鈍く光る包丁。

男は嘲笑うように島秋から距離を取る。

「おいおい、物騒な物をお持ちだなぁ嬢」

「私の質問に答えて」

「あん？」

男が眉を潜める。

荒い息を吐く島秋。

確かめなくてはならない。

父である島秋正木には母の死は事故による物だと聞いていた。

だが、真実は違った。

警察と名乗った男の一言。
知りたい。
もう一度、深く息を吐く。
そして、
「島秋　加織、この名前、知ってるの？」
その瞬間。
息が詰まるような緊張感が島秋にのし掛かる。
「…ああ、島秋　加織ね」
男は顎に手を当て、思い出したと言わんばかりに口を動かす。
「知ってる知ってる。そう言えば嬢ちゃんも島秋って名字だったよなぁ？」

「……そんなことはどうでもいい、…答えて！」

怒号を放つ島秋。

うんうん、と男そんな島秋に上下に頭を振りながら口元を緩ませ、

そして。

「一年前に殺したあの正義感溢れるどうしようもない女だろ？」

「……え」

その瞬間。

島秋の頭が真っ白になった。

「まぁ、正確にいえば前のリーダーだった男に殺されたんだけどな。ありゃ、見物だったぜ。散々いたぶられて、あげくのはてに血吐きまくって死んだんだからなぁ」

舌を出し、垂れた唾液を舐め男は愉快に笑い、

「そう言えば、そっくりだな、あの女と」

男は島秋にゆっくりと近づいて行く。

『花は私に似てるのよ』

母の声。

ずっと昔、聞いたその声は島秋にとってかけがえの無いものだった。

大切だった。

好きだった。

ずっと……

家族三人でいたかった。

「うぅアアアアッ！！」

島秋は包丁を振りかざし、男に降り下ろそうとする。
しかし、男は軽く降り下ろされた包丁を避けると、その包丁を持つ腕を捕まえ、

「そう焦るなよ」
「ッ！」

手を振り払おうとする島秋。
だが、それよりも早く男はその腕を引っ張り、

「ニヒィ！！」

ドォン！！と広場出口に腕ごと島秋を叩きつけた。

「ッが！……」

手に握っていた包丁が床に転がり落ちる。
荒い息を吐き、痛みにうずくまる島秋。
そんな島秋を、男は床に落ちた包丁を手にとり、

「おい、立てよ」
「アッ！？」

髪を無理やり掴み、島秋を前向きにさせ直後。

ズバッ！
無惨に胸元の服が切り裂かれた。
島秋の胸元から下着や、肌が露になる。

「……ァ…」
「いい体だぜ、本当に」

男は舌で唇を舐めつつ、倒れる島秋の上に馬乗りになりその手が島秋の体に触れようとする。

だが、

「……いや、これじゃあ面白くねえな」

男は島秋から離れ、そして、

「おい、お前ら。好きにしていいぞ」

その言葉と同時に十人の男たちが島秋に歩み寄り、リーダーの男は背を向けながら元いた位置に向かい歩き出す。

男たちは笑いながら一歩一歩、島秋に近づいて行く。

島秋はうっすらとした目で、迫りくる男たちを見る。

思うように体が動かない。
叫びたくても叫べない。

瞳から大粒の涙が溢れだす。

何もない。

……。

悔しい。

悲しい。

辛いよ……。

何もできない島秋の頭に皆の顔が浮かび上がる。

真木ちゃん。

玲奈ちゃん。

お母さん。

お父さん。

そして、

籔笠……く……ん。

……。

「お前らみたいなクズが、島秋に触るなよ」

ボキッバキ、と

複数の鈍い音が鳴り響く。

島秋はその声にゆっくりと目を開く。

いるはずの無い。
そのはずなのに、
ありえないはずなのに、
ゆっくりと抱き上げられる島秋はぐしゃぐしゃの涙まみれの顔で、
島秋は唇を動かす。
「籔笠……くぅ…ん…」
「……島秋」
籔笠の声が震えている。
近くにいる。
側にいる。
だけど、
「に、逃げ……て……籔笠……く」
「何で逃げないといけないんだ？」
「……それ……わ…」

「鍵谷と浜崎を…お前の友達を待たしてるんだ」
ゆっくりと、籔笠は近くの壁に島秋を寝かせ、
「お前は頑張った……だからゆっくり休め」
その言葉を最後に、島秋の意識は眠りについた。

「……何な、で言、わなかった…」
リーダーだった男の声が震え上がっている。
顔色が真っ青になり、側にいた二人の男たちも同じように顔色が染まっている。
二人の男たちは今、起きたことがわからなかった。

目の前で起きた事が何なのかわからない。
普通の人間がすることじゃない。
それだけはわかった。
いや、それだけしかわからなかった。

「スコーピオン」
籔笠は島秋を寝かすと、ゆっくりと振り返り歩き出す。
床には人間が倒れている。

だが、
人間たちの腕や足はありえない方向に曲がっていた。
籔笠はリーダーの男に尋ねる。
「お前、俺の事が分かるのか？」
「ッ……ァ……」
「……そうか、お前、あの時に逃げた残党か」

籔笠は口元を緩ませ、一歩。
また一歩。

「まぁ、そうだよな。あの時のスコーピオンにいた大体は今頃刑務所だもんな」

残っていた二人の男たちは、籔笠から距離を取ろうと足を動かす。

そう、動かした。

その瞬間。
バキィ！！

と、強烈な音が二つ鳴り響いた。
そして、男たちは無言のまま地に倒れた。

「あ、ああアアアアッ！？」
「残党が一年たってリーダー。笑えるな」
籔笠は笑いながら倒れる男たちの側にいた。
そして、再び歩き出す。

男は、籔笠が近づくたびに後ろに下がる。
「何で……何で……！」
しかし、籔笠が男の前に来る時には。
男の逃げ道はなかった。
「……、くる……くるな…来るなアア！！」
「……」
息を吐き、静寂な空間の中で籔笠は口を開く。
「……スコーピオンも…島秋も、全部は俺の責任だ」
「……な、なに言ってッ」

その瞬間。
男の声が止まる。

死ぬ。
殺される。

恐怖、絶望、無。

それらすべてが頭の中に一斉に弾けた。

「命だけは、残してやる」

籔笠はそこで、唇を一度閉じた。

そして、一言。

「四季…装甲……」

声が聞こえた。

『花、起きて』

……真木ちゃん。

『花、授業終わったわよ』

……玲奈ちゃん。

『島秋……』

……籔笠……くん。

「……っ」

島秋はゆっくりと目を開けた。

視線の先には月が写し出された川が見える。

「ん、起きたか？」

ふと、声が聞こえた。

籔笠芥木の声だ。

そして、そこで島秋は今、籔笠に背負って貰っていることに気づいた。

「や……籔笠…く」

「多分、アイツら鍵谷たちが呼んだ警察に捕まってんだろうな」

「……そう」

島秋は、籔笠の言葉を聞き口を閉じた。

嬉しい。
だが、同時に悔しい。

籔笠の背中に顔をうずめる島秋。

静寂が続く。

籔笠は場の空気を変えようと、島秋に話しかける。

「……お前のお袋さん、綺麗な人だよな」
「……」
「……島秋も綺麗だけどな」
「……」

籔笠の呟きに対し、島秋は反応を示さない。

……無理だよな、と籔笠は呟き肩をすくめた。

そして、静寂なまま一刻一刻と過ぎた。

その時。

「……島秋、俺の質問、よかったらちょっと聞いてくれるか？」

今までと違った声で籔笠は口を開いた。

声が弱々しい、と島秋は思った。

「……何？」

ありがとう、と籔笠は答える。

「……もし……もしも…」

「……うん」

「……お前のお袋さんを助けれたのに助けれなかった奴がいたら…」

「え……」

その瞬間、驚く島秋。

しかし、籔笠は口を閉じることはせず、

「……島秋は、どうしたい？」

フッ、と冷たい風が籔笠と島秋の横を通り過ぎる。

島秋はゆっくりと小さく、息を吐き、
そうして、答えた。

「……何も、しないよ」
「……」
「……だって、もう……分かってるから…」

ぎゅ、と島秋は籔笠の体を抱き締める。

「…そんなことしたって、辛いだけだもん…」

島秋の腕の震えと、耳元から聞こえてくる震えた声が籔笠の足を止めた。後悔、が籔笠の心に突き刺さる。

「……ごめん、島秋」

籔笠は小さな声で謝り。

「帰ろう、……鍵谷たちが待ってる……」

籔笠と島秋は、共に鍵谷と浜崎のいる居場所に帰っていった。

「こいつはどうなってるんだ……おい」

三十歳過ぎの男は部下に対してそう尋ねた。

男の名前は、東（あずま）　次代（じだい）。

警察の中で警部にあたる人物だ。

救急車とパトカーが廃墟のビルの周辺に集まっている。通報により完全装備をし、突入した警察だったが駆けつけた時、そこはまさに地獄絵図だった。

「全員、腕やら足やらの骨が折られていて、さらにリーダーだった男に至っては片腕片足の骨が粉々に砕かれてるそうです」

「……」

「それに、全員揃って骨を折った奴の顔を覚えていない、と」

どうなってるんだ、と東は息を吐いた。
通報で駆けつけたらこの有り様、さらに通報によれば高校生二人が危ないと聞いていたが、高校生どころか子供の姿すらない。
そして、一番に厄介な問題が、

「い、嫌だ……助けて何でするから！！お願いだからぁ！！」

暴れ狂う男。
調べでリーダーだということはわかった。
が、

「ありゃ、精神科行きは決定だな」

ハァ、と重い息を吐く東。
その時。

「……アイツ」
「ん？どうした坂川？」
部下の一人である坂川（さかがわ）　広（ひろ）が何かを呟いたのに気づいた。
しかし、坂川は何でもないと言って離れて行ってしまった。

坂川はあの病院での一人の少年の言葉を思い出す。

『お前もスコーピオンと同様に消してやるよ』

坂川は歯噛みし、そして呟く。

「籔笠芥木……」

春の終わり。
静かな夜が終わった。

春の終わり（前書き）

挿絵を載せて見ました。
よかったら感想お願いします。

春の終わり

>i36054—1659<

日の光が窓から差し込む中。

ゆっくりと目を開かせた、島秋　正木は体を起こそうとした。
しかし、体は思うように動かず小さな溜め息を吐く。

そして、茫然と周りを見渡した時。

「あ、……籔笠くん、かい？」

壁に寄りかかっていた籔笠に正木は口元を緩ませた。

籔笠から昨日の夜に起きた出来事を大まかに聞いた正木は、そうか、

と目を細める。

「……スコーピオンは全部終わらした。……悪かったな、あんたの生き甲斐を取っちまって」

「……いや、それよりも」

「……ん？」

正木に顔を上げ、視線を向ける籔笠。

そこには優しげに笑った島秋正木の顔があり、

「花を守ってくれて、ありがとう」

その言葉は籔笠にとって良いものではなかった。

「……君を恨んだりはしないよ。私には君みたいな力はないからね」

「……そんなこと」

「私はあの子の気持ちを分かっていたのに見ぬふりをしていたんだ。私はただ加織を死においあったあの子達に似た彼らを止めたかった

んだ」

島秋正木は側にいつも持ち歩いていた手帳を思い出す。

密かにスコーピオンを調査して、ボロボロになるほどにメモした手帳。

しかし、その行動が今回、目をつけられ。

娘まで巻き込んでしまった。

「籔笠くん」

正木は籔笠に振り向き、

「花の事を頼めるかい？」

「……俺なんかで」

「私は昔の君に言ってるんじゃない。今の君に頼んでいるんだ」

正木は口元を緩ませながら優しげな笑顔を浮かべる。

その表情はどこか島秋　花に似ている。

そして、その心も。

「……やっぱり、あんたたちは親子だな」

籔笠は答えることはせずに病室から出ていく。

そして、出ていくさいに開け閉めしたドアに体を預け、籔笠は一言、

「……憎んでくれても、いいのに」

その声は静かに、その場を静寂させた。

「花、心配したのよ」
「馬鹿！馬鹿！」

花が寝ている個室では浜崎と鍵谷が騒いでいた。
病院では静かに、といったことなど無視だ。

「ごめんね、真木ちゃん。玲奈ちゃん」

頬には湿布が張られ、少し憔悴した顔色が見える。
泣きじゃくる鍵谷の頭を撫でる島秋。
そこで島秋は浜崎に尋ねる。

「玲奈ちゃん。……籔笠くんは？」

「籔笠」
「ん、鍵谷か？」
籔笠は病院の屋上から下に見える桜の木を見ていた。
桜は地面に落ち、春の終わりを感じる。

「花がアンタに会いたいって」
「ああ」
「後、二人とももう少し入院するみたい」
鍵谷は籔笠の隣に歩み寄り、地面に咲く桜を見つめる。

「籔笠、知ってる？」
「ん？」

鍵谷は口元を緩ませながら、

「桜って出会いと繋ぎの象徴なんだよ」

瞬間。
籔笠の脳裏に思い出す。

『桜って、出会いの繋ぎの象徴なんだよ』

「籔笠？」
「あ、いや、……何でもない」

小さく笑い、そう言う籔笠。
変なの、と鍵谷は笑いながら屋上の屋上に向かい歩いていく。

桜が風に舞い、地面に落ちていく。

「春も終わりだな」

籔笠はその景色を眺め、そう呟く。

「籔笠！！置いてくよ！」
「ああ、わかったわかった。今行く！」
「…早くこないと籔笠が屋上から看護師さんのことといやらしい目で見てたって玲奈と花に言っちゃう」
「鍵谷ぃぃぃ！！」
「キャアアア！痴漢ンン！！」

春が終わり。
次の季節が訪れようとしている。

春の終わり（後書き）

次回から夏編に入ります。

辛いと思っていても・1（前書き）

夏編に突入です！！

後、文は少ないんで、

辛いと思っていても・1

夏。
季節が過ぎる中で一番に楽しみが沢山ある季節。
一年生にとっては唯一の癒しであり、クーラーに当たって一日中眠っていたい。

そう、いわば夏休みに近づくにつれてわくわくが止まらない、

「そんな季節何でお願いします、明音先生。見逃してください！！」
「いや、無理だから…っか鍵谷。そんな季節だからこそ夢見て浮かれてんじゃねえよぞコラ」

指導室。
成績がよくない生徒を呼び出し、彼らを優しく丁寧に地獄に送る。

そして、今。
鍵谷　真木は生徒指導担当の長髪女教師、清近（せいちか）　明音（あかね）に呼び出され、かれこれ三十分は経っていた。

「はぁー」

籔笠は息を吐く。

現在、籔笠は外の中庭の石段に座り込んでいた。

隣には、

「真木ちゃん、遅いね」

あれから数日が経ち、笑顔を取り戻した島秋　花が苦笑いを浮かべている。

四時間授業が終わり一緒に昼飯を食べようと誘った直後、鍵谷は指導室へと呼び出され（実際は清近に襟首を捕まれ連行された）直ぐに終わるだろうと待っていたのだ。

浜崎は用事があるらしく先に帰ったのだが、

『あ、明音先生？……何でそんな物をッ！？』

『鍵谷、アンタにはちょっと調教が必要なようなの。まぁ、バカのアンタにはわからないだろうけど』

『ああ明音せん』

『鍵谷、覚悟決まった？』

……。

『ウニャァァァァァァァァァッ！！』

ドガバコッ！？と、
中庭まで、二階にある指導室からの騒音が聞こえてくる。

「……籔笠くん、何か」
「聞くな、島秋。もう手遅れだ。それよりも親父さん元気」

『逃げるな、鍵谷！！』

「う、うん。今はちょくちょく来る同僚の人と世間話して」

『助けてぇぇ！！花ぁぁ！！』

「そうか、親父さん思ったより元気でよかったな」
「う……うん、よかった」

制裁！！、グハッ！？と、

どうやら、決着がついたらしい。

あ、真木ちゃん死んだ！？、と顔を青くする島秋。

しかし、決着がついたかと思ったが、

『はぁ、……仕方ない。鍵谷、道連れを一人言ってみろ。それで少しは罰を優しくしてやる』

『明音先生！簸笠でお願いします！！』

『即答だな、おい』

トン、と足をつき立ち上がる簸笠は、

「悪い、島秋。あのバカしばき倒してくる」

簸笠が一瞬にしてその場から消え、数秒後。

『明音先生！道連れとは言わずにコイツだけ地獄に叩き落としてください。』

『ッ！？先生、簸笠も成績はギリギリなんです！！ぜひとも』

『ぶっ飛ばすぞ、鍵谷！！』

白熱とかした指導室。

島秋は苦笑いのまま指導室から目をそむけ、空を眺める。

「……暑いなぁ」

季節は変わり、夏が始まった。

辛いと思っていても・2（前書き）

やや、鍵谷が可哀想な感じです。

辛いと思っていても・2

昼の二時。
今ごろなら家でゆっくりとくつろげていた。

はずなのに！！

「あー……島秋」
「な、何？」
「俺、何か悪いことしたのか？」
「え、いや、籔笠くんは何もしてないと」
「だよな。…それなのに暴れたから連帯責任って、明音先生が一番暴れてたし、あの時行かなくても俺道連れに」

直後。

「アア！！うるさい！！せっかく解けそうだったのに、アンタのせいで忘れちゃったじゃない！！」
「知るかボケ！！っかお前のせいで俺まで課題しやげるはめになったじゃねえか！！」

喧嘩勃発となる鍵谷と籔笠。
苦笑いを浮かべる島秋。

今、籔笠たちは島秋の家に来ていた。

「クーラーどう？」
「あ、効いてる効いてる。ありがとう、花」
「なぁ、島秋。そういえば親父さんは」
「お父さん今ちょっと同僚の人と食べにいってるの」

やや、気まづく笑う島秋。
あの事件から数日がたち、島秋正木は無事で退院した。
しかし、まだ怪我が全部完治したわけではなく、週一に診察を受けにいってるらしい。

家で安静にしてられねえのかねぇ、と飽きれる籔笠。

「花、お願い！教えて！！」
「ははは……」

まぁ、目の前で道連れにしたあげくに人様に教えをこおうとしてる奴よりはマシなのだが。

籔笠は頭をかきながら、諦めムードで課題にペンを走らせた。

そうして二時間が経ち、

「島秋……大丈夫か？」

「……だ、大丈夫」

既に疲れはて肩を落とす島秋。

目の前では涙目で課題に噛みつかんとする鍵谷の姿が。

「うぅ……」

「……島秋のお陰で半分までは行けたのか……っか島秋が全部やったと同じじゃ」

「うぅうるさい！！そう言うアンタはでき」

「ちょうど今、終わった」

うぅ、と口ごもる鍵谷。

確かに勉強はそんなに優秀とはいえない籔笠だが、本気を出せば、実は意外にできる籔笠。

あまりにも悲惨な現状に考えこみ、そこで籔笠は尋ねる。

「そういえば、何で藍さんに相談しねえんだ？」

ピシッ（鍵谷）……。
ピタッ（島秋）……。

……え？

その一瞬、今までの空気が冷たく凍りついた。

「おい、お前ら」
「ささ、さぁやろ花！」
「う、うん！そうだね真木ちゃん！」

疲れが吹き飛んだように動き出す二人。
何がなんだかわからない籔笠はふと時計に視線を向けた。

時刻は六時。

そろそろ切り時だな、と思ったその時、

「ん？」

ブー、ブー、と、
ズボンに閉まっていた携帯の振動に籔笠は携帯を取り出し開いてみた。
画面には着信画面が出ており、籔笠は通話ボタンを押し、

「あ、はい。もしもし」

邪魔だろう、と携帯を持ったまま席を外し、玄関に行ってしまった。

「誰と話してるんだろ？」
「さぁ？」

島秋と鍵谷は首を傾げるも再び課題に向かいペンを走らす。
だが、微かに玄関から籔笠の声が聞こえてくる。
鍵谷はやや、気になり耳をすまし、そして。

「いや、今それの巻き沿いで課題やらされてるんですが……。アイツに勉強させるように言ってもらわねえと俺まで被害が来るんで」

その瞬間。
バン！！と足音をたて、
「や、籔笠！！」
「ッ！？な、何だ、いきなり！？」
通話を切った携帯を持ちながら、驚く籔笠。
見ると、いきなり現れた鍵谷の顔は真っ青になっている。
「あ、ああの……や、籔笠……今、誰と」
体をガクガクと震わせながら慎重に尋ねる鍵谷。そして、一方でやや硬直ぎみの籔笠は携帯の着信履歴を見せながら、
「いや、藍さんに。夕食でも一緒にどうか、って……」
ほら、と携帯画面を見せる籔笠。
着信履歴には島秋　藍という名前が表示されている。
そして、それを見た鍵谷は力なくしゃがみこみ、

「……ぅぅ、ううう」
「は？」

直後。

「ううわぁぁぁぁぁん！！籔笠の馬鹿ァァァァァ！！」
「ッ！！？」

盛大に涙を流しながら泣き叫ぶ鍵谷。

「は、はぁ！？な、なな何、泣いてんだよ！？」

慌てるまくる籔笠。
すると、その声に駆けつけた島秋は鍵谷をなだめるべく抱き締め、
籔笠に対しては、

「籔笠くん、ちょっとやりすぎだよ！！」
「いや、何が！？」

翌日。

昨日、島秋の付き添いで一緒に家に帰っていった鍵谷は学校を休んだ。

そして、籔笠は今。

清近　明音に呼び出され、指導室に来ている。

「籔笠、いくら何でもやりすぎだと先生は思うぞ」

「……それ、島秋にも言われた」

あれから島秋に会うと何故か凄く痛々しい視線を向けられてしまう。籔笠自身、何もしたつもりはないのだが、どうやら鍵谷　藍に知られてしまったのがいけなかったらしい。

「明音先生。俺、ただ藍さんに鍵谷の事を言っただけなんですが、それが何でこんなことになるんですか？」

「……」

籔笠の質問に対し黙りこむ清近。

何やら苦々しい表情になっている。

息を吐きながら立ち上がった清近は、窓を眺め、
「籔笠。少し昔話をしよう」
「…は？」
まぁ聞け、と明音は続け、
「昔、ある所にそれはそれは可愛らしいポニーテールの女子高校生がいました」
「……」
「そして、もう一人。超努力派のピチピチボディーの女子高校生もいました。彼女たちはとてもとても仲良い友達どうしでした」
「明音先生」
「だから、まぁ聞けと」
「ポニーテールって、自分のこと評価しすぎでッガ！？」

直後。
バシッ！！と、籔笠の眉間にチョークが炸裂した。
「ふー、……ある日、ポニーテールの彼女は赤点すれすれといった窮地にたたされていました。そして、努力派の彼女に勉強を教えてもらうよう、頼み込みました」
「……」
「しかし、その時。彼女は知りませんでした。それが地獄の始まりだとは……」
「ん？地獄？」
籔笠が首を傾げると、清近は、ああ、と言って近くにあった椅子に

腰をおろした。

「藍は努力派だった」
「あれ、もうさっきのシナリオは止めたんで」
「藍はまず、食事を部屋に用意するんだ」
「おい、無視かよ」
「聞け。こっちも思い出すだけで体の震えが止まらないんだ」
ふと見ると清近の腕が微かに震えていた。
それほどまでにこの話をするのが嫌だったのだろう。

「最初は気のきいたことしてくれるんだな、って思ったよ。思ったんだよ。だってそう思うよな普通！！」
「いや、俺に聞くなよ！？」
半分涙目で尋ねた清近は、悪かった、と言って涙を拭き取り、

「でも……違ったんだ」
「違った？」
「ああ……藍の奴。少しずつ分かるところから教えてはくれる。くれるんだよ。……でも、段々と教えるレベルが上がっていって……」
そこで清近は言葉を切り、深く深呼吸をしてから息を吐き。
そして、

「丸々５６時間。……調教された」
「！？？」
「最初に用意した食事は逃げる隙を無くすための策略で、お手洗いっていったら小さな単語ぎっしりの手帳を渡され、帰ってきたら即小テスト。しかも間違ったら倍の課題地獄！！」
「……あ……あ…」
「あの時は土日の次の日がテストだったから二日で逃げ出せたけど……テスト後は死んだよ、私」

壁にもたれかかり、再び涙目になる清近。
恐怖が体に染み付いているんだろう。

「……じゃあ、鍵谷が休んでるのは…」
「昨日、学校に電話が来たんだ」

回想。

「あ、もしもし。久しぶりだな藍」
『ええ、久しぶりね明音。でも今はそれどころじゃないの』
「え？」
『明音。そろそろ抜き打ちテストとかあるわよね？』
「ああ、まぁあるけど」
『よかったら、いつやるのか教えてくれないかしら？』

「え、いや、いくら何でもそれは」

『出して！！お願い！藍さんお願いだから出してぇぇぇ！！』

「……」

『悪かったわね、明音。真木ちゃんの事で苦労をかけて』

「あ、あの、藍」

『で、いつやるの？』

回想終了。

「…幸い、三日後。抜き打ちテストがあるから、まぁ生徒たちには教えてないけど……その日まで休むって」

ズーン！！と、
思い沈黙が漂う。

「籔笠」
「……」
「テスト終わったら何でも鍵谷の言うことを聞いてあげなさい。それぐらいしてもバチは当たらないから。っかしてあげて！！はっきり言って私は二日ですら死ぬ勢いだったから！！」
「……はい」

その日、
籔笠は頭を抱えながら過ごし、
その次のまたその次の日も頭に勉強が入らなかった。

そして、

三日後がやってくるのだった。

辛いと思っていても・3（前書き）

よかったら感想お願いします。

辛いと思っていても・3

時刻は八時二十分。

「……こないね」
「……こないわね」

島秋、浜崎は教室のドアを見つめながら呟く。
そして、横目でちらっと視線を向けると、

「……」

現在絶賛へこみ中の籔笠が座り込んでいた。
あまりの責任感に頭が入る物も入らず、今回の小テストはまず赤点だとか。

「あー、玲奈ちゃん。真木ちゃんに電話とかした？」
「一応は……でも多分没収されてると思う」
「……だよね」

深く溜め息を吐く浜崎と鍵谷。

そうして、

「お前ら、静かにしろ」

清近　明音が本日の担当の教師先生らしい。
教師が来たことにより皆が席につく。
清近はそれらを確認すると視線があった浜崎と島秋を見てから、籔笠と隣の開いた席を見てやや気まずくなった。

と、

「遅れてすみません」

ガラガラ、と力ない音とともに少女が入ってきた。
手には本が握られていて、いかにも勉強できます、といった印象が強かった。
まぁ、それが余計に遺憾を感じてならないのだが、

「……あ、あの」

籔笠は顔を上げ、隣に座る少女にそっと話しかけ、

「鍵谷さ」
「何？」

ようとした自身に物凄く後悔した。

少女は笑っている。
確かに何の迷いもなく、そう。

般若のように。

「……」

「私を地獄のドン底に落とした籔笠くん。どうしたの？」
「すみませんでした！！」

籔笠は顔を伏せ、深く謝った。
しかし、鍵谷からの返事は無く。

思い空気のまま時間とともにテストが始まった。

わからない。
というかこの緊迫感が辛い。
籔笠は今だ一問も解けずにいた。
横目で鍵谷の様子さえうかが得ずにいた。
というか見たら即アウトだ。

どうしよう、と頭を抱える籔笠。
その直後。

ガダッ！と音と共に鍵谷が立ち上がった。
ビクッ、と体を震わせる籔笠。
しかし、鍵谷は一切こちらを見ることなく担当である清近に向かって歩いていく。
清近自身、恨まれることをした覚えが少しもないといえばないわけがない。
やや、ビビりつつ息を飲む。

「先生」
「な、何？」
鍵谷は清近の顔を見て、ニコッと笑いながら、
「もう全部埋めたんで退室します」
バシン！！とテスト用紙をを教卓に叩きつけ。
それだけだった。
ガラガラ、とドアの閉める音とともに出ていった鍵谷。
皆が数秒後に一斉に息を吐いた。
そして、
「「「「「「簸笠」」」」」」
「！？」
ものすごく視線が痛い。
やっとの緊迫感から解放されたと思った矢先、これとき。
俄然、落ち込みそうになる簸笠。
そんな簸笠に清近は近づき、
「簸笠……」

「明音先生」

……。

「まぁ、バチだと思って頑張れ」

「お前ら、嫌いだ！！」

直後。

籔笠は教室を飛び出していった。

「……鍵谷さん」

「……」

実習室。

テスト中は退室者の待機室となっている。

籔笠は椅子に座り、鍵谷は窓から空を眺めていた。

「……」

「……」

沈黙が続く。
すると、
「ねぇ、籔笠？」
くんずけはもういいんだと、内心安心する籔笠。
「な、何」
「空ってきれいだね」
きれいってどんだけ締め出されてたんだ！？
あまりにも合わない言動と行動。
それだけで鍵谷　藍の恐怖がどれだけのものか分かる。
考えただけでゾッとする。

籔笠は目を閉じ、一度心を静め、そして。

「……あー、もしもし」
「？」
その言葉に鍵谷は振り返ると、そこには携帯を手に籔笠が誰かと話していた。
そう、そういう態度なの、と。

鍵谷はフルフルと震えた拳を握りつつ、だが。

（……アホらし……）

拳から力を抜き、再び空を眺める。
せっかくの平和な日常。
目の前の奴と相手して潰したくない。
鍵谷は小さく息を吐いた。

と、どうやら電話を終えたらしい。
籔笠は携帯を直すと、何やら苦々しい表情で、

「鍵谷」
「……何よ」

つい反射的に答えてしまった。
鍵谷は苦い表情で、しかし籔笠の言葉を待つ。

……。

だが、いくら待っても返事がこない。
余計にストレスがたまり、怒号を飛ばしそう。

とした、その直後。

「……今日から、三泊二日。俺んちな」

……はい？。

キンコンカン、と終わりのチャイムが聞こえてくる。

籔笠は気まずいのか、そそくさと出口に向かい歩き出す。

「ち、ちょっと！」

「んじゃ、待ち合わせは前の待ち合わせだった公園、五時に」

そう言って籔笠は行ってしまった。

「……なんなのよ」

鍵谷は茫然とした表情で息を吐き、早く教室に戻ろう、と足を動かす。

ふと、そこで鍵谷は思う。

（あれ？三泊二日。三泊って明日から土日だから、えっとだから……）

言ってしまえば泊まり。

しかも、籔笠と一緒の。

誰にも邪魔されない。

……。

直後、ボン！！と顔全体を真っ赤にさせ、

「ふえええええええええええええ！！？！」

その後、授業中。
思考停止となった鍵谷を見て男女の生徒たちから、何をした、と殺気こもった視線を籔笠はおくられるはめになった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8076i/

季節高校生

2011年12月11日22時52分発行